



Z32-B88

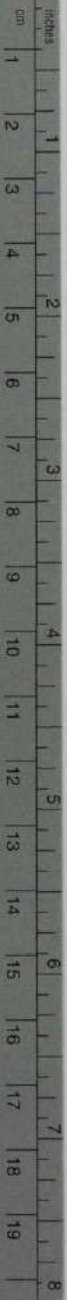
島崎村 有島生馬 監修

金の船

二月号

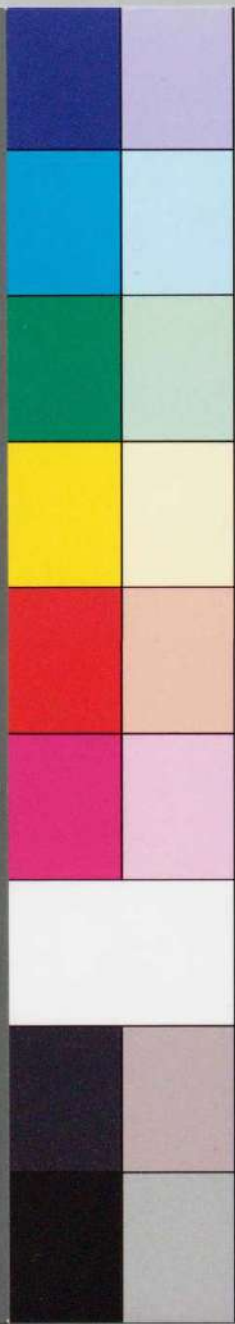


号二第



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM, Kodak

金の船の主催お伽大會

第一回
モリスルリクンク作
青い鳥
観劇會
本日最初心有な童話劇

▲時日 二月十四日(全曜日) 二月間
正午開場 午後一時開演

▲場處 有樂座

□入場料

△特等金 參 圓△二等 貳圓五十錢
△二等金 二圓△三等 金八十錢
(但本誌ノ割引券持参者ニハ割引アリ)

□金の船主催の下にメーテルリンクの世界的童話劇「青い鳥」を演ずる事になりました。「青い鳥」の上演は、日本童話劇の最初の記念すべき興行であつて、しかも理想的訓練を経たる民衆座により、興行界の驚異と稱せられる程の莫大な費用を投じて演ぜられるのですから、此の芝居が如何に價値あるものか想像されませう。

□この立派な、面白い芝居を「金の船」のめづらしい贈物として、愛讀者諸君に捧げたいと思ひ、來る二月十四日十五日の二日間有樂座に於て本誌主催の「お伽大會」として此の劇を演ずる事にいたしました。どうぞお誘ひ合されて是非御覽下さい。

○金の船のお伽大會には、少年少女諸君の御來會を特に歓迎いたしますが、御両親をはじめ先生やお女中のお附添は勿論、その他の諸君の御出席も差支へありません。

○會の當日は混雑いたしますので、從つて豫め座席のお申込みがなすと、到底よい場處で御覽になる事が出来ませんから、割引券に入場料を添へて早くから有樂座内金の船お伽大會係りへお申込み下さい。早速入場券をお送りすると同時に、よい座席をとつて置きます。座席の定つてゐる方は、御入場前案内いたします。もし、入場券を買ふ事案内には合はしません。電話で直接有樂座へ座席でも御申込みなさいませう。(但し三等だけは座席の區別がありません)

○本誌觀劇會に御來會の出来なない方は、民衆座の普通興行の日に御覽なさい。二月十一日から十七日迄有樂座に於て、毎夕午後五時から開演されます。但し普通興行には入場料の割引がありません。

時日 二月十四日 割引券御持参の方には、二月十五日 割引券御持参の方には、二月十五日 割引券御持参の方には、午後一時開演 割引券御持参の方には、午後一時開演 割引券御持参の方には、午後一時開演

場處 有樂座

割引券 (一枚二名限り)

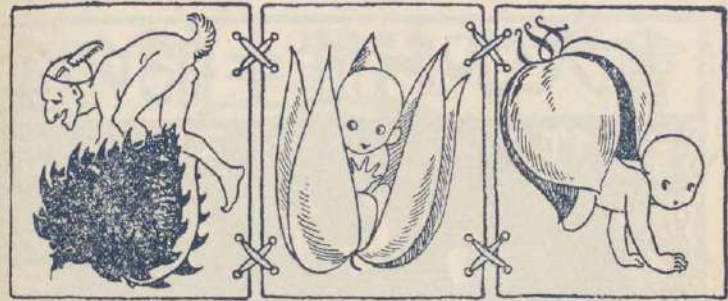
東京九段 キンノツノ社

△特等 金貳圓
△一等 金一圓五十錢
△二等 金一圓
△三等 金五、十錢



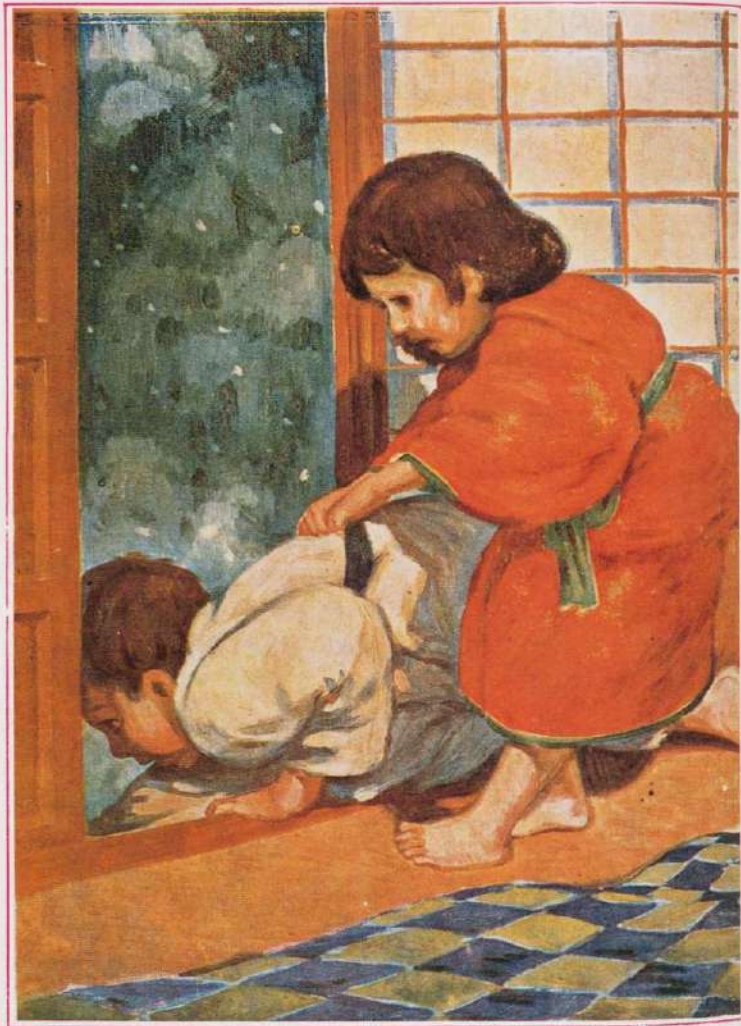


土の観音様(傳説)……………五十嵐 力
 ちいさな鶯(童話)……………若山 牧水
 よい友達(童話)……………神 原 泰
 雪夜の小猿(童話)……………徳永 壽美子
 雪の神様(童話)……………横 山 壽篤
 飼猫と飼犬(童話)……………橋 逸 雄
 鳥の伯母さん(童話)……………野 口 雨情
 星(幼年詩)……………若山 牧水選
 鳥屋のおちさん(綴り)……………
 私の家(自由畫)……………山 本 鼎選
 通信……………
 挿繪……………岡 本 歸 一
 製版……………田 中 松 太 郎



「金の船」二月號 第二卷第二號
 チルチルとミチル(表紙、石版刷)……………岡 本 歸 一
 何アにっ(口繪、三色版)……………
 雀の唄(山詠)……………萱 間 三 平
 みそさざい(童話)……………野 口 雨 情
 秀太さんの犬(童話)……………有 島 生 馬
 山さち川さち(童話)……………沖 野 岩 三 郎
 銀の翼の生えた人(童話)……………前 田 晃
 雀の夢(童話)……………三 長 田 秀 雄
 私のお家(童話)……………茅 野 雅 子
 自動車のステッキ(童話)……………小 山 内 薫
 石の馬(童話)……………小 林 愛 雄





何アに？

雪は綿を投げるやうに、大きなかたまりになつて降り續いてゐましたので、外は雪あかりでかなり明うございました。と、すぐ軒下の所に、一匹の小さな獣が死んだやうになつてうづくまつてゐました。朝彦は兵兒帯を輝子にしつかりとおさへて貰ひながら、手をのばしてそれを掴み上げました。

「何アに？」と輝子が尋ねました。「雪夜の小孩（第五十四頁）」



すいめの歌

作曲 長萱 田三 雄平

雀、すいめ、何を食ふ。
ハイハイ、爺の忠助は
お米を一粒たべます。
雀、すいめ、何處にねる。
ハイハイ、爺の忠助は
瓦の間にやすみます。
雀、すいめ、何をやる。
ハイハイ、爺の忠助は
皆と遊んで、居ります。
雀、すいめ、何處にゐる。
ハイハイ、爺の忠助は
地面に埋つて居ります。
雀、すいめ、どこへ行く。
ハイハイ、爺の忠助は
めいどの旅へともゐります。

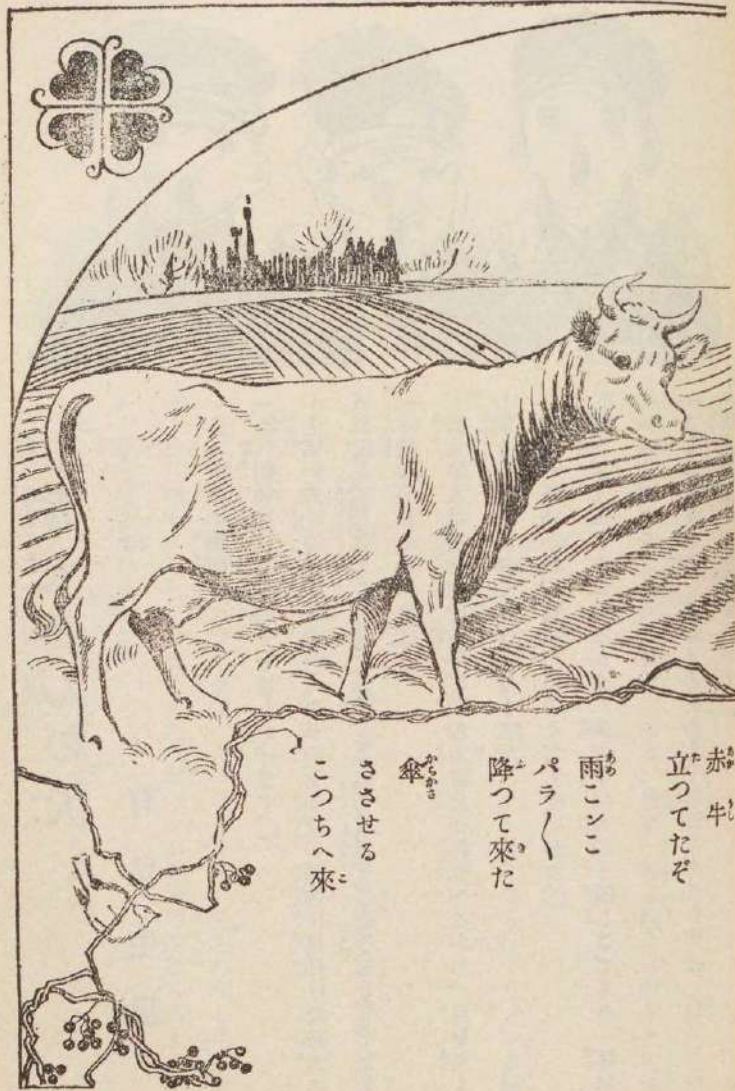
○二十一頁「雀の夢」より

変ロ調

7 7 i | 7 7 0 | i 7 6 4 | 3 0 |
ニ ス ス ノ スズメ ナニヲフ
ニ す ず め すずめ こ に ね る

4 3 4 3 | 4 6 6 | 7 6 4 4 | 3 0 |
ハ イ ハ イ ガ イ ノ チ ウ ス ケ ハ
は い は い ぎ ぎ の ち う す け は

6 7 7 | i 7 6 4 | 3 3 2 | 3 0 |
オ コ ノ ヲ ヒ ト ツ プ タ ベ マ ス ル
か は ら の あ ひ だ に や す み ま す



赤牛
立つてたぞ
雨こんこ
パラ〜
降つて来た
傘
ささせる
こつちへ来

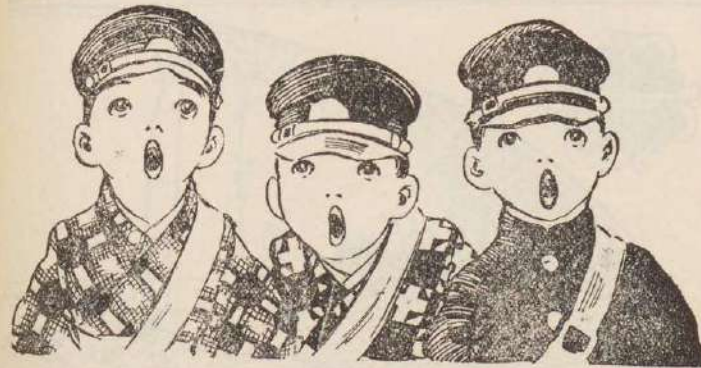


ちゅちゅ
鳴いてる
鳩
鳩
鳩に

みそささい
野口雨情

秀太さんの犬

有島生馬



あるお家の御門柱に、

「お入用の方に、犬の子をさしあげます。」

と書いた小さな紙が張つてあるのを學校の歸途に見付けた秀太さんは、お友達のお國三さんと一緒にその前に立停つて考へてみました。

「本統に呉れるのかね。」

秀太さんは靴の紐を右手で前の方に力一杯支へながら、目を丸くし胸をどき／＼させて云ひました。

「唯呉れるのかね、賣つてゐるんぢあないかね。」

國三さんもさう云ひながら、胸の中は犬の子欲しさでもう一杯になつてゐました。

「さしあげると書いてあるのだから、呉れるんだらう。」
「唯呉れるんなら僕欲しいよ。」



「僕も欲しいよ。」

二人は恐は／＼、聞いてみやうかと相談してゐる處へ、他に三四人學校歸りのお友達が來合せたので、皆な一緒に聞きに行くといふ事になりました。

「皆な一緒に云ふんだよ、いゝから、一二三だよ。」

よし、よしと皆なはどや／＼御門の中へ這入つて行つて、お玄関前に小さなお客様が六人ずらりと並びました。

「いゝから、一二三だよ。」

と秀太さんがもう一度念を押して、一二三と合圖の號令をかけました。そこで六人は聲を揃へて、

「犬下さるよ、犬下さるよ。」

と二度大きな聲で云つてみて、どうなる事か、叱られやしないかと、少しびく／＼してゐましたが、家の中から何の返事もありません、はてなと思ひました。

「聞えないのかな……もう一度言つてみやうか。」
と今度は國三さんが號令をかけて、



「僕も欲しいんです。」
と國三さんも云ひました。



「犬下さいな、犬下さいな。」
と又揃つて前よりも一層大きな威勢のいゝ聲でもう一度叫びましたから、玄關の障子はびり／＼と云ふし、屋根からは瓦が落ちさうでした。

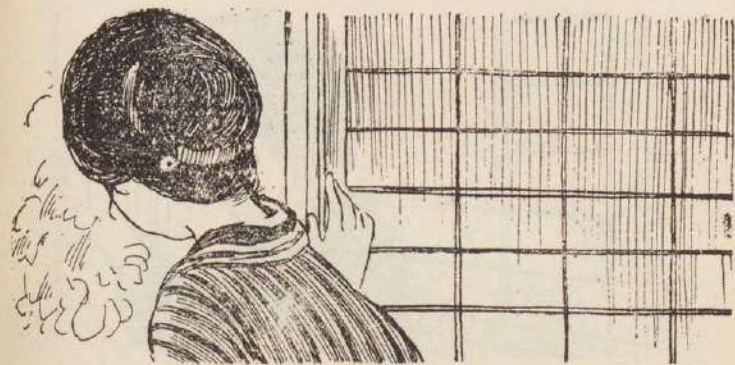
このお家は正夫さんのお家でした。正夫さんのお母様は、竹を相手に奥の茶の間で、針仕事をしてゐらつしやいでしたが、玄關の方で、とんでもない大きな聲が二度もしたので、お母様はびつくりして持つてゐらした鉄を膝の上にお茶しになるし、竹は地震か火事かと思つて飛び上りました。

「なんだらう。」
「なんでございませう。」
二人は顔を見合せてゐますと、又三度目の聲が、玄關の方から聞えて來ました。

「犬下さいな、犬下さいな。」
「ああらお子供さん達のお聲のやうだね。何をがや／＼大勢で云つてゐるんだらう。」



つて聲がしました。正夫さんのお母様は、
「そら正夫さん、あれだよ、あれが、天下さいな、だよ、さつき来たつてお話ししたでせう、……さあ行つてみませう。」
正夫さんとお母様は玄關へ出ました。
今度は秀太さんと國三さん二人切りで、二人とも、もう鞆は下げてはゐませんでした。
「何んとおつしやつて、お家でいゝとおつしやつて？」
お母様が二人にお聞きになりました。
「えゝ家ではいゝつて……。」
「家ではいけないいつて……。」
秀太さんは嬉しさう、國三さんは悲しさうに、さう云ひました。
「ではいゝとおつしやつられたあなただけに上げませうね。」
とお母様が秀太さんにおつしやつて、正夫さんには裏の犬子屋に二人を御案内するやうにと、お云付けになりました。正夫さんと秀太さん達とは、學校が違つてゐましたが、皆な同じ二年級で同い年でした。(つづく)



「あゝさうですか、お入用ならば上げますけれども、お家でいゝとおつしやつたんですか、それを聞いていらしたの？」
「いゝえ、まだ聞きません。」
「僕もまだ聞きません。」
「そう、そんなら一度お家へ歸つて聞いてから又いらつしやいな。お家でいゝとおつしやれば、何疋でも上げますからね。どうぞさうして下さいね。」
「小母さん、さよなら。」
だしぬけに秀太さんがさう云つたかと思ふと、くるりと後向に、もう馳け出しましたから、國三さんも、あとの四人も、遅れては大變だと、我れ先に皆な一生懸命で連れて行つて終ひました。
「もう行つて終つた。可愛い坊つちやん達だね。」
と笑ひながら二人は玄關の障子を締めました。
正夫さんが學校から歸つて、お八つを半分と少し喰べて終つた頃、又玄關から、
「小母さん、天下さいな。」

山さち川さち

沖野岩三郎

二

子猿には、チョンといふ名をつけて家内中が大變大事にして可愛がりました。信次とは、まるで兄弟のやうにして毎日、跳んだり撥ねたりして遊びました。けれども與兵衛に一番よく馴れました。與兵衛が田圃から歸つて來ますと、直ぐチョンは其の肩に駆け上つて白髪交りの髪の毛を引張りました。御飯を食べようと思つてお膳の前に坐ると、直ぐチョンは與兵衛の膝の上に入つて、そしてお膳の上にある、お芋の煮たのやら、お豆の煮たのを、お先へ失敬してムシヤ〜と食へるのでした。けれども與兵衛は、ちつとも夫れを叱らずに、チョンよ、チョンよと言つて可愛がつてゐました。

或日の事、與兵衛は川へお魚を釣りに行つたが、どうしたものか其日は不思議な程お魚が能く釣れるのです。大抵一つの淵で大きな



鯉が必ず一つづゝ釣れるので、もう一つ、もう一つと思つて、ついで川を上へ〜と上つて行きました。そして不圖氣付いてみると、十四五間上手に大きな榎の木のあるのが眼に止りました。

『あ、あの榎の木だつたつて、チョンの母猿を射つたのは？』
與兵衛は斯う言つた後で、思はずも南無阿彌陀佛々々々々々と言ひました。そして川原に立竦んだまゝ、おつと其の榎の木を眺めて居ますと、榎の枝は大きな〜傘のやうに廣がつて其の片一方はずつと淵の上の所まで伸びてゐました。

『何と大きな榎の木だなア。』と呆れて見てゐると、榎の枝がザツ〜と動くぢやありませんか。與兵衛はガクリとして釣竿を杖にいたしました。立つて居ると、猿が何疋も枝から枝へ跳びあるいてゐるのです。

『おや！ 又た猿が居るナ？』與兵衛はブル〜顫へながら見て居ると、川の方に差し出た細い枝の上に大きな親猿が一疋、何と思つたかスル〜と傳つて來て、輕業師のやうにぶら下りました。枝が弓のやうに輪を畫いて圓く曲つたと思ふと、其枝はポツキと折れて



大きな親猿は小枝を握つたまゝ二十間もあらうと思はるゝ高い所から、ドブン！と淵の中へ真逆様に落ちたのでした。

「あっ！」と叫んで與兵衛は吾知らず川原を上の方へ駆けて行きました。行つて見ると深い淵の真中に落ち込んだ親猿は、樫の枝を握つたまゝ首だけ漸と水の上に出して浮いてゐました。木の上ではあれだけ敏捷な猿でも、水の中では一尺も泳ぐ事が出来ないのです。猿の一番禁物は水なのです。

「よし、今、俺が助けてやる！さア此の釣竿に縄れ」

與兵衛は斯う言つて釣竿を差出してやりましたが、猿は水底深く沈んで行く樫の枝には縄つてゐても、與兵衛の釣竿は見向きもしません。



「助けてやるんだよ、おい、助けてやるって云ふのに、與兵衛は斯う言ひましたが、悲しい事には猿に人間の言葉は通じませんから、親猿は却つて齒齧を剥き出して唸るのでした。

すると今度は山の上から小猿が五疋十疋とゾロ／＼川岸へ出て来ました。彼等は與兵衛が鐵砲を持つてゐないのを見て安心したらしく向ふの川岸へ下りて来て、「其の親猿を、其方へは遣らぬぞ！」といふやうに、キャツ！キャツ！言ひながら、川端の柳の枝に掴まつて水の中へ手を伸して見たり枯枝を差出して見たりしたが、親猿の浮いてゐる所へは屈きません。親猿は川の中で、顔だけ水の上に浮べて悲しさうに時々啼きました。

與兵衛は不圖氣付いて手に持つてゐた釣竿を、向岸に投げてやり



「よし、お前は俺を戀しいのか、では伴れて歸つてやる！ 死ぬまで大事に飼つてやらう、そして死んだら、お前のお母アと一緒に墓に葬つてやるぞ！」
與兵衛は斯う言ひ乍ら川を渡りました。そして、大きな聲で川向ふの猿に對つて、
『皆さん左様なら！』と云ひました。けれども猿共は不思議さうな顔でデロ／＼とチョンと與兵衛とを見て居るばかりでした。(をばり)



ました。夫れを子猿に投げつけたのだと思つたらしく、子猿共は一時影へ隠れましたが、又た出て来て、今度は其の釣竿を一定の可成り大きい兄さんの猿が掴んだと思ふと、夫れを淵の中へ差出したので、親猿は直ぐ夫れに取違つて難なく岸に這上りました。親猿は餘程弱つたと見え、大きな岩の上にバタリと倒れたまゝ動きませんでした。子猿達は親の生命を助けたのを喜ぶやうに、又た親の身上を氣支ふやうに、其の周圍を取捲いてみました。
其時與兵衛は一生懸命に川原を下の方へ駆けてみました。そして家へ走り歸つて信次と追駈ゴッコをして遊んで居たチョンを抱きあげて『さア、チョン、お前をお父さんに返してやるぞ！』と言つて其まゝ又た川原を上へ／＼走つて行きました。
行つて見ると川向ふの岩の上には、まだ子猿が親猿を取捲いて日向ゴッコをして遊んで居ました。
與兵衛は淵の上手の淺瀬を渡つて向岸に行つて、チョンを川原に座らせて、『さア、チョンよ、彼所にお前のお父さんが居る！ お前は——もう、お父さんの所へお出で！ さア早くあつちへお出で！』



銀の翼の生えた人

前田 晁



一六

可哀さうに雅子ちゃんは、轉んだ拍子に足首の所を挫きました。どんなにか痛かつたでせう。わつと泣き出したのも無理ではありません。

それといふのも、元を質せば小犬のベスが悪いのです。雅子ちゃんが仲の好いお友達と一緒に、暖い日の當つてゐるお庭の芝生で、機嫌よく飯を食つて遊んでゐました時に、ベスが息をきつて

駈けて来て、まるで大きな獨樂かなんどのやうにくる／＼とみんなにじやれかゝつて、お人形さんをも何をも駈け散らしてしまつたのです。で、みんなが怒つて、總立ちになつて、ベスを追はうとした時でした。どうした機みでか、雅子ちゃんが石に躓いて轉んだのです。ベスはさん／＼に叱られて、犬小屋に繋がれさ

した。そして雅子ちゃんの足首には、お醫者さまが来て薬を塗つて、厚く繻帯をして下さいました。痛みはよつほど去りましたが、獨りでお床の上に寝てゐますと、雅子ちゃんは無性に悲しくなつて來ました。だつて、仲の好いお友達はみんな、面白さうに外で遊んでゐるのに、自分獨りは淋しく寝てゐなければならぬのですもの。それも無理ではないでせう。

でも、これだけならまだ／＼よかつたのですが、其の翌日は、丁度日曜に當つてゐましたから、家ぢうの者がみんなて鎌倉の海岸へ遊びに行くことになつてゐました。所が、雅子ちゃんは、其の足首の怪我の爲めに行けないことになりました。おあさまと二人だけで、家に残つてゐなければならぬことになりました。

それが、かういふ樂みにしてゐた當ての外れたことが、七つになつたばかりの雅子ちゃんに取つて、どんなにか悲しかつたでせう。それは思ひや

つてやらなければなりません、それにしても雅子ちゃんのぐづり方はあまりに烈し過ぎました。おあさまが何と機嫌を取つて、宥めたり憐しかりしても、一向聞き分けやうといたしません。で、おあさまもしまひには少し持て餘して、『どうしてあなたは、さう辛抱が出来ないのでか？世間には、鎌倉の海岸へなぞ一通も行かない子供だつてどつさりあるぢやありませんか。』と怒つたやうに言ひました。

さう言はれて見ると、雅子ちゃんも『なるほど』と思はぬ譯には行きませんでした。雅子ちゃんは今も幾度も行つて居りますのに、仲の善いお友達の中にさへ、まだ一通も行かない者も幾人かありましたから。けれど、それだからと言つて、今度行けないことの悲しさには少しも變りがありません。雅子ちゃんはぐづる事は止めましたが、其の代りにしく／＼と泣き出しました。

それを見ると、おあさまは、今はもうどうす

一七

ることも出来ないといふたやうに、雅子ちゃん一人を其處に置いて、黙つてお茶の間の方へ行つてしまひました。

雅子ちゃん

んは一人になると、目を瞑つて、ぢつと考へてゐましたが、そのうちに、だんだん、自分のあんまり我が儘であつたのが恥かしくなり初めました。そして「これからはとなくしくしますから。」とおかあさまに申上げようといふ氣になりました。と、其の時、不意に、誰かが肩の所へやさしく手をかけたやうな



ただ違つてゐるのは、冠をかむつてゐないことだけですが、其の代り、言ふのも不思議なやうな美しい大きな銀の翼が肩の所に生えて

ぬました。

雅子ちゃんはびつくりしながら、

「どなたなの、あなたは？」と訊きました。

「わたしですか。」と女の人はにっこりと笑つて、

すわ。

「ぢや、ずいぶんあなたは忙しいのね。」

「わたしはいろ／＼な名で呼ばれてゐますが、あなたの爲には、さうだね。辛抱を教へる人」といふのが一番よい名のやうですね。少し長い名ですけれど、でもすぐ覚えられますわ。」

「さう、何處からいらしたの？」と雅子ちゃんはまだ氣が落ちつかずに尋ねました。

「あの向うの、銀色をした雲の中からですよ。ですから御覽なさい。わたしの翼は銀でせう。あなたが今も呼びなすつたから、この翼でさつと一と飛びに飛んで來ましたの。」

「あらーわたしが、あなたをお呼びしたつて！」

と雅子ちゃんは驚いて言ひました。

「さうなの、あなたは先つきちかあさまが辛抱するやうにと仰つたのを覚えてゐませう。あなたは、其の時は耳にもかけなかつたが、そのうちに、自分の我が儘なことが分つて、となくしくしやうと思つたでせう。誰でもさう思つた時に、わたしはやつて來て、其の人達に力を添へてあげるの

氣がしましたので、そつと目を明いて見上げて見ますと、ぢきそばに美しい女の人が立つてゐました。其の人は、いつかお伽芝居で見た女王さまによく似てゐました。

「わたしは、さういふ氣になりませんでした。と、おかあさまに申上げようといふ氣になりました。と、其の時、不意に、誰かが肩の所へやさしく手をかけたやうなぬました。」

雅子ちゃんはびつくりしながら、

「どなたなの、あなたは？」と訊きました。

「わたしですか。」と女の人はにっこりと笑つて、

すわ。

「ぢや、ずいぶんあなたは忙しいのね。」

「いゝえ、忙しいやうだとわたしも嬉しいんですけれど、さうでないの。」と女の人は悲しげな顔をしながら、「どなたも、なか／＼わたしを呼びたがらないのですよ。でも、今はわたし、ちよつとしさや時間がないの。實はね雅子ちゃん、わたし、あなたと一緒にちよつとした旅をしやうと思つてゐるの。」

「だつて、わたし、歩かれませんわ。」と雅子ちゃん

は困つたやうな顔をしました。

「いゝの。わたしが抱いて行つて上げますから。」

と女の人は兩腕を擴げて見せました。

「でも、足を痛くしないでしようか。」

「いゝえ、そんな事はありません。わたしが呼ぶやうな子供達はね、大抵何處か痛くしてゐるものですから、わたしもうすつかり慣れてしまつてゐますの。」

さう言つて女の人は寢床から雅子ちゃんを抱き起すと、翼をばつと擴げました。と次ぎの瞬間には、二人はもう高い木の上を飛んでゐました。

『何處へ行くの?』と雅子ちゃんは、女の人の腕の中で、いかにも樂々と氣持のよいのを驚きながら訊きました。が、女の人は、

『お待ちなさい。』と言つただけでした。

そのうちに、二人はいつか空が煙で暗くなつてゐる場所に來ました。今はもう木などは全くなくなつて、煙突の頭だけが、ついついと並んで下に

見えてゐました。

『やつと來ましたよ。』

女の人は不意にさう言つたかと思ふと、高い煙突のそばを掠めて、ずつと下の方のごみくしした汚い家のある所へ行つて、とある小さな部屋の高窓の外に止りました。そして、

『其處を御覽なさいよ、雅子ちゃん、わたしの仲善しの一人がゐますから。』と言ひました。

雅子ちゃんは破れた障子の穴から、そつと中を覗いて見ました。と其處には、自分と同じ年ごろの小さな娘が、汚い蒲團の中に寐てゐました。顔は大變蒼く、瘦せてゐました。そして部屋は、いかにも狭くて、汚くて、雅子ちゃんのお家の臺所にも、物置にも、劣つてゐました。

『あの子が手に持つてゐる物が見えますか?』と其の時女の人が訊きました。

『ぼろの丸めたのですわ。』と雅子ちゃんはちつと目を据えながら言ひました。

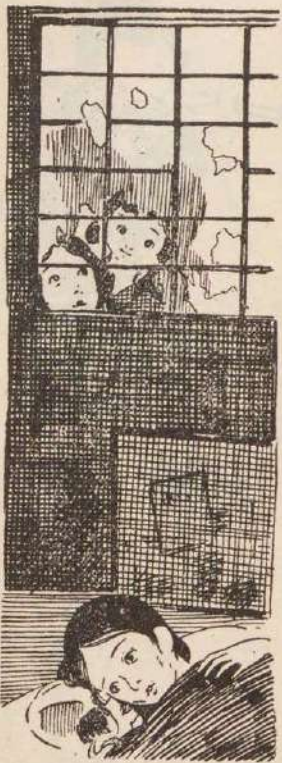
『さうでせう。でもあの子はね、あれが世界中で一番美しい人形だと思つて、あなたが、あなたの好きなおもちやを可愛がるよりもずつとく可愛がつてゐるのですよ。それにあの子はね、可哀さうに脊骨を挫いてから、一年中寝てゐるのですよ。』

『一年中!』と雅子ちゃんは目を丸くして言ひました。『ぢやあわたしの足よりも悪いんだわね。』

『悪いんですとも。けれどあの子は、不平等なからつと高く舞ひあがつて、間もなくお家に着きました。女の人は、雅子ちゃんを元の通りに寢床の上に置いて、そして

『左様なら。』とやさしく言ひましたが、ふとまた返つて『すぐにあなたは目が覺めるでせう。(それは夢ですから)でも、これから先きは、あなたがわたしを思ひ出さうとしないで、あなたがとなしく、辛抱強くならうとする時には、いつてもわたしはあなたのそばに居りますよ。』

さう言つて、雅子ちゃんの額にそつと接吻すると、翼をばつと擴げて瞬く中に行つて了ひました。所が、不思議ではありませんか。夫からといふもの、雅子ちゃんは一度も其の夢を思ひ出しはしませんでした。が、いつてもよく物に満足して、不平等な言はなくなりしました。(をばり)



決して言つたことはありません。いつてもちつと辛抱してゐます。『わたしは康子ちゃんのお所へあなたを連れて行つてゐる暇のないのが残念ですよ。康子ちゃんといふ子はね、一度海岸へ行つたばかりなんだが、それからといふものは、泥と缺けた貝殻とて、いつもおとなしく遊んでゐるの。今でも、先に海岸でやつたやうに、それでお城を築いてゐる氣になつてゐるのですわ。……さあ、もう時間がありませんからお家へ歸りませうね。おかあさまが見にいらつしやらないうちに……。』

女の人がさう言つたかと思ふと、二人はまたふ

せんか。夫からといふもの、雅子ちゃんは一度も其の夢を思ひ出しはしませんでした。が、いつてもよく物に満足して、不平等な言はなくなりしました。(をばり)



雀の夢

長田 秀雄

太郎さんは、お父さんから買つて貰つた空気銃を持つてお家の裏の野原に出ました。

まだお日さまが上つたばかりでした。温かいお日さまの光が、まぶしいやうに、太郎さんの上に照り輝いてゐました。雀が、チュウ、チュウ鳴いて嬉しうに飛び廻つてゐました。日曜で學校がお休みだから、お晝までにお家へ歸ればよいと思つて、太郎さんは、おみよさんの

家へ行きました。おみよさんは、太郎さんと、大の仲よしてした。

おみよさんは、丁度、お茶の間で、お父さんやお母さんと一緒に朝の御飯をたべてゐました。太郎さんは、おみよさんを待つてゐる内に、一つ空気銃で何か射つてやらうと考へました。廣いお縁がはに腰かけて、お庭中を見廻はしましたが、何も射つやうな物は見付かりませんでした。おみよさんは毎朝自分が御飯をたべる前に、ま

つと、お米を一つかみ持つてきて、お庭にまいて置くのでした。自分たちが喰べるのに、朝早くからチュウ／＼鳴いてゐる雀に喰べさせないのは可愛さうだと思つたからです。

その朝も、雀は澤山集まつて、おみよさんの下さつたお米を、楽しさうにたべてゐました。射つものを捜してゐた太郎さんの眼に、その雀が見えました。『よし、雀を射つてやら



ら。』と思つて、太郎さんは、空気銃のねらひを定めました。

そんな恐ろしい事が起らうとは、雀は夢にも思ひませんでした。

雀 すゞめ 何をくふ。
ハイハイ、爺の忠助は
お米を一粒たべます。

雀 すゞめ、何處にぬる。
ハイハイ、爺の忠助は
瓦の間にやすみます。

雀 すゞめ、何をする
ハイハイ、爺の忠助は
皆と遊んで居ります。
かう云ふ歌をうたつて、あつちへ飛んだりこつ

ちへ飛んだりして、喰べてゐるところに、太郎さんは空気銃を射ちかけました。

驚いて雀たちは、パツと飛び散りました。が、可愛さうに、一羽のお米をたべかけてゐた雀は、胸を射たれて、コロリと死んでしまひました。

太郎さんは大喜びで、その雀をひろひました。まだ身体には滋味が残つてゐました。死んだ雀は太郎さんの掌の上に、重もりと乗つて、黒い南京玉のやうな眼を開けたまんまで、グタリとなつてゐました。

そこへおみよさんが、御飯が済んだので、出てきました。

おみよさんはそれを見て、大そう悲しみました。そして太郎さんに、

『生物の命を取るなんて悪い事だわ。』と云ひました。太郎さんも悪いとは思ひましたが、つひ負け

おしみて、

『何だい、雀なんか殺したつて構ふもんかい。』と云ひました。おみよさんは、たうとう怒つてしまひました。そして

『ちや、もうあたし、太郎さんと遊ばないわ。』と云ひました。太郎さんは空気銃を兵隊のやうに肩にかついで歸つてしまひました。

おみよさんは泣くなくその雀をお庭の隅に葬りました。

併し、太郎さんは、晩になつて、床に入ると、おみよさんと遊ばなくなつたのが、悲しくなりました。その内にうとうと寝てしまひました。

ねむつてゐる太郎さんの耳に何處からとなく悲しい調子の唄がきこえてきました。

雀、すゞめ、何處にゐる。

ハイハイ、爺の忠助は

ました。

太郎さんの寢床の枕のところに、小さなお爺さんが、しょんぼり坐つてゐました。

『お前は何か。』と恐いので、わざと強さうな聲で太郎さんが訊きますと、その老爺さんは涙をこぼして、一つお辭儀をしました。そして

『私は忠助と申す年を取つた雀て御座います。』と云ひました。

『何しに來たんだ。』と、また、太郎さんが訊きますと、

『ハイ、胸が痛くて仕様がありません。』と云つて、空気銃の弾丸を、胸のところから出してみせました。

太郎さんは、あ、悪い事をしたと思つて泣きたくなりました。忠助は

『私は、もう大へん年を取つて居りま



地面に埋つて居ります。
雀、すゞめ、何處へゆく。
ハイハイ、爺の忠助は

めいどの旅へとまゐります。

太郎さんは、その唄をきいて驚いて眼をさまし

す。これまで長い間、おみよさんのお情のお米を頂いて、生命をつないで居りました。おみよさんの御思は、忘れる事が出来ません。おみよさんは死んだ私を、大さう可愛さうに思つて下さつて、泣くなくお庭の隅に埋めて下さいました。そして太郎さん、あなたの亂暴なのを、情ない事だと思つてゐらつしやいます。あなたは、おみよさんの一番仲よしのお友だちですのに、あなたが、おみよさんにあやまりもしないで、歸つておしまひなすつたので、おみよさんは、大さう淋しがつてゐらつしやいます。太郎さん。あなたはおみよさんが好きですか。』

『大好きなんだよ、僕は。』と、太郎さんは、涙を流して忠助に答へました。

忠助は、うれしさうに笑ひました。そして『そんなら、太郎さん。明日の朝、學校へ行く前

に、おみよさんの家へ行つて、よくあやまつていらつしやい。そして、もうあんな亂暴な真似をしないやうにしなければいけません。』と云ひました。太郎さんは素直に、

『あゝ、おや、忠助、僕明日おみよさんにあやまりに行くよ。』

『あゝ、さうなさいまし。よく忠助の云ふ事をきいて下さいました。』と、忠助は云ひました。太郎さんは忠助にもあやまらなければいけないと思ひました。そこで

『忠助、許しておくれよ。僕、空銃を買つて貰つた嬉しまぎれに、つい、射つたんだからね。殺さうと思つてゐたんぢやないんだよ。』とあわびを言ひました。忠助は悲しさうな顔をして、

『忠助は、もう年を取つて居りますから、さう生命を惜しいとは思ひません。たゞ、あとに残つた

子供たちが、澤山居りますから、おみよさんと二人で可愛がつてやつて下さい。』と云ひました。

『あゝ、いとも、これからきつと可愛がつてやるよ。』と、太郎さんは喜つて答へました。

『太郎さん、どうぞ情深い人になつて下さい。』

忠助の姿は、かう云ふかと思ふと、段々に小さくなつて、とうとう一羽の死んだ雀になつてしまひました。

太郎さんは、今度は本統に眼がさめました。

『あゝ、夢だつたのか。』とかう云つて、太郎さんは起きてしまひました。もう夜が明けてゐました。



太郎さんは、空銃を持たずに、早速、おみよさんのところへ行きました。

忠助の子供の雀は皆でおみよさんがお米をくれるのを待つてゐました。

雀 すじめ、何をくふ。

ハイハイ、爺の忠助は

お米を一粒たべます。

太郎さんはこの唄をさくと雀が可愛くて耐らなくなりました。太郎さんはおみよさんにあやまつて、また二人仲よ

しになりました。そして二人で忠助の子供たちを可愛がりましたとさ。(をばり)



もう。
 そして妹が摘むで来た。
 奇麗な花を瓶にさし、
 四かくの窓のそばにおく。
 白い小猫は屋根のうへ。
 森の梢になく鳥の
 たのしい歌をききながら、
 お父さま—お母さま、
 お茶あがる。



私のお家

茅野雅子

私が大きくなつたらば、
 石のお家をたてませう。
 家のまへには白馬が
 ひひ、ひん、ひん。
 うしろの方ではあめ色の
 大きな牛が、



自働車のステッキ

小山内 薫

ひます。ブウブウといふのは自働車の喇叭の音なのです。

宏ちゃんは踏臺でも椅子でも——時によると、障子をはづした丸窓でも——なんでも、腰のかけられるものさへあれば、直ぐとそれに跨がります。さうして、兩手を前の方へ延ばして、自働車の運

そこで、最後にあたしが、

『自働車は。』

と聞きますと、宏ちゃんは顔中笑鬨だらけにして、

『モットル、カア』

と答へるのです。

二

宏ちゃんは夜早く寝るんで、朝早く起きて困ります。まだ女中がやつと起きて、お釜の下に火を焚きつけたか焚きつけない時分に、もう目を覺まして、直ぐ起きようとするのです。

『宏ちゃん。まだ早いですよ。もつと寝ておらつしやい。もつと寝ておらつしやい。』

あたしがこの位の事を言つても、宏ちゃんは中聞かないのです。ブウブウ、ブウブウと言ひな

あたしの家の宏ちゃんは今年五つになりましたが、まだなんにも分かりません。唯、自働車だけが大好きで、機嫌さへよければ、朝から晩まで、ひとりで口を尖らして、ブウブウブウブウやつて

轉手がハンドルでも廻す時のやうな形をして、ブウブウブウブウと頬べたをふくらませて言ひます。その時の宏ちゃんの豪さうな顔と言つたらありません。

さう。さう。まだ言ふ事があります。宏ちゃんは犬と猫と象の外に自働車の英語を知つてゐます。

『宏ちゃん、英語で犬は。』

からあたしが聞きますと、

『ドッグ。』

と、得意になつて答へます。

『猫は。』

『キャット。』

『象は。』

『エレチャン。』

宏ちゃんはどういふ譯だか、エレファントの事をエレチャン、エレチャンと言ふのです。

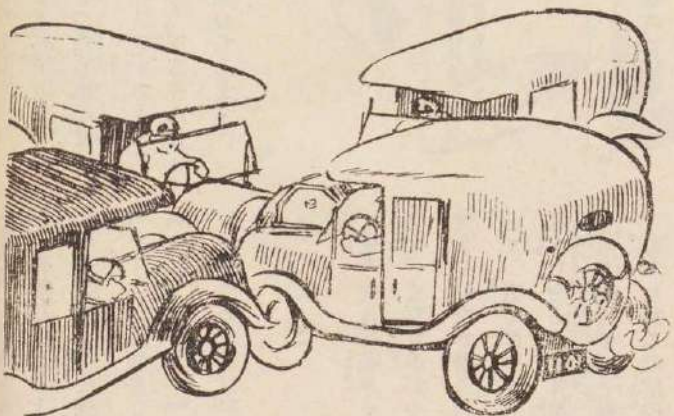
がら、床を飛び出さうとするのです。

それも夏の暑い時分か何かならまだ好いのですが、冬の寒い朝などは風を引きやすいでせう。

だから、あたしは心配するのです。が、宏ちやんの方では一向平氣なのです。

そこで、あたしは宏ちやんが目を覚まして、床から出ないやうにする策を考へました。

なんでも好いから自働車の話をするのです。でたらめでもなんでも好いのです。自働車といふ事さへ言へば、宏ちやんはどんなにあればいてゐる時でも、直ぐおとなしくするのですから。



どんなに無理な事を言つて、ママを困らせてゐる時でも、

『宏ちやん、宏ちやん自働車がねえ……。』

もうこれだけ言へば、直ぐニコ／＼して、こつちを向いて、おとなしくなつてしまふのです。

そこで、あたしは毎朝床の中で、ならんで寝てゐる宏ちやんに、てたらめな自働車の話をするのです。

いつか宏ちやんは目を覺ますとブブブブブブブと言ひながら、直ぐ寢床を飛び出さうにするので、

あたしは宏ちやんの體をしっかりと抱き込んで、

『宏ちやん、宏ちやん、自働車がね……。』

と言ひました。すると、宏ちやんは直ぐおとなしくなりましたが、その日に限つて宏ちやんは、しきりとその後を聞きながらゐるのです。

『自働車がどうしたの。ババ。自働車がどうしてよ。ババ。話して頂戴よ。ババ。』

宏ちやんはかう言つて、せびるのです。

そこで、あたしは口から出放題に、

『向うから赤い自働車が來ました。こつちから白い自働車が來ました。すると、又こつちから青い自働車が來ました。』

と、かう言ひました。すると、宏ちやんはもう嬉しさに目を細くして。

『そえから、そえから。』

と言ふのです。あたしは又てたらめに、

『それで、その赤い自働車と白い自働車と青い自働車とが、三つ一緒にぶつかりました。』

と、かう言ひました。宏ちやんは愈々嬉しさを顔をして、又、

『そえから。そえから。』

と、後を聞くのです。あたしは少し困りましたが、構はず又てたらめを言ひました。

『すると、白い自働車が赤い自働車に怒りました。赤い自働車が青い自働車に怒りました。青い自働車が白い自働車に怒りました。みんな、やい間拔、目を明いて歩け。』つて。

『そえから、そえから。』

『すると、二つの自働車が一緒にかう言ひました。「あれ達は夜は大きな光る目が二つあるが、晝間は盲だ。だから、ぶつかつたつて爲方がない。」つて。さうすると、みんな成程と思つて、笑つて

分かれまして。』

『そえから、そえから。』

『それでおしまひさ。』

宏ちやんは詰まらなさらな顔をして、しばらく考へてゐましたが、やがて、急にかう言ひました。

『自動車は盲なの。』

『ああ、盲だよ。晝間だけは。ほら、夜は大に目光が二つ光つてゐるだらう。だけれど、晝間はあそこが光らないで、唯がらんどになつてゐるだらう。だから、自動車は晝間衝突するんだよ。夜は目があるから、中々衝突しないんだよ。』
あたしがから答へますと、宏ちやんは不思議さうな顔をしました。

『ぢやあ、自動車は晝は盲なの。』

『ああ、盲だよ。』



三〇
と言つて、宏ちやんはまだよく分らないやうな顔をしてゐました。

あたしは、あんまりでたらめを話したので、それを子供に本氣にされてはならないと思つて、もうその自動車の話はやめにしました。

そして、飛行機の話は何かを言ひました。

三

それから十日ばかりたつた或日曜日の事でした。あたしは宏ちやんを連れて、日比谷公園の方へ散歩に行きました。前の晩雨が降つたので、まだ道は悪うございましたが、空はまつ青に晴れて、あつたかな太陽の光がぼか／＼差してゐました。

自動車に泥よけといふものが出来たのは、丁度その時分でした。宏ちやんはまだその泥よけを見た事がありませんでした。

虎の門まで来ると、戦ヶ關の方から自動車が一臺来ました。宏ちやんは「自動車。自動車」と言つて、躍り上がつて喜びました。

その自動車は四つの車の輪に泥よけを付けてゐました。ところが、その泥よけの一つが破れて、ぶら／＼、ぶら下がつてゐました。それは丁度人間がステッキを引さずりながら駆け出す時のやうに地面へくついたり、地面を離れたりしてゐました。

宏ちやんは直ぐとそれを目をつけました。さうして、その方を指さしながら、から言ひました。「パパ。晝の自動車は盲なのねえ。だから、ステッキを突いてゐるんでせう。」(をほり)。

石の馬

小林 愛 雄

三六

寒い冬の日の、夕方のことでした。朝から獵に出てゐた王様はまだ一羽の鳥もとれないので、

がっかりして樹の根へ腰を下しました。森の中には、ひゆうくと北風が鳴つてゐました。ところへ、ばらりと雨が降つて來ました。暗い夜が段々と近づいて來ます。

からだを顫はせてゐた王様は、家來に向つて、

「かういふ時に、暖かい火の傍の、白い寢床の中で、柔かい麵麩を食べ、おいしい牛の乳を飲み乍ら、昔の話でもしてゐたら、どんなによからう」と云ひまし



た。其の時、遠くの方に、ちらちらする灯が見えたので、行つてみると、それは小さな百姓の家でした。

王様も、家來達も、喜んで其の家の中に入つてみますと、暖かい火があり、白い寢床もあり、柔かい麵麩も、おいしい牛の乳もあつて、何もかも望みどほりの家でした。

みんなは、火にあたりながら、麵麩を食べたり、牛の乳を飲んだりしましたが唯一人の家來は、どうしたものか、眠られず外には、まだ雨や風が戦さをしてゐるやうです。

その時窓の近くに、誰の聲とも知れず、怪しい音がして、
「あまへは、先刻何と云つた?」「かういふ時に、暖かい火の傍の、白い寢床の中で、柔かい麵麩を食べ、おいしい牛の乳を飲み乍ら、昔の話でもしてゐたら、どんなによからう」と云つたのではないか。それをもうお前は忘れて昔話もしないで寝てしまつた。明日歸り路に、蜜柑の



三七

樹の所へ来ると、お前は食べずには居られなくなる。だが食べればお腹が裂けて仕舞ふ。——今云つたことを家來が聞いてゐて、お前に話すと、その家來のからだに石になつて仕舞ふ。そしてその時馬に乗つてゐれば、代りに馬が石になつてしまふ。」と云ひました。

これを聞いてゐた家來は、びつくりしました。その家來は、『これは大變なことになつた。今誰か云つたことを、王様に話さなければ、王様のお腹は裂けてしまふ、話せば私のからだに石になつてしまふ。どうしたら、よからう？』

と心配して、眠られるどころではありませぬ。

雨の音や風の音が、少しづつ静つて行くやうです。

二

いつとなく夜が明けました。

その日は不思議にも、ゆふべの雨や風がやんでしまつて、晴れやかな青い空が白い雲の間から見えてゐました。

眠られずにゐた家來は、『夜が明けた、夜が明けた！』



と云つて、外の家來達を起しました。

其の聲に、王様も目を覺まして、床を離れ、

『さあ、早く歸ることにしよう』

と、家來達をつれて、その家を出ました。

森の中は静まりかへつてゐました。

皆の人達は、今朝からまだ何も食べておませんから、段々とお腹のすいてゐることにばかり氣をとられました。さうして

段々と歩いて行く足が遅くなりました。森が盡きると、丘が遠くへひろがつて

ゐました。

みんなが丘の麓まで歩いて来ると、美しい蜜柑の樹が見當りました。其の樹には黄金色をした蜜柑が鈴生りに生つて、枝が折れさうに思はれる程、路傍へしなつてゐました。王様は、その蜜柑を見ると、食べたくてたまらなくなつたので、思はず其の樹の近くへ急ぎました。

其の時、前の夜に誰とも知れぬ聲を聞いた家來は、直ぐとその樹の傍へ駆けて行つて、根元からその樹を切つてしまひました。すると、潭山の蜜柑がばら／＼と地面に落ちたかと思つて、蜜柑は残らず灰になつてしまひました。それを見ると、王様は大層怒つて、



「あの家來を、切つて仕舞へ！」と云ひました。けれどその忠義な家來は、早くも駆け出して、何處かへ隠れて仕舞ひました。王様はいよいよ怒つて、
「あの亂暴な家來が、城へ歸つて來たら、すぐとつかまへ、私の眼の前へ連れて來い。」と云ひました。外の家來達は、どうなる事かと心配して王様の城へと急ぎました。

三

外の家來達が城へ歸つて待つてゐると、姿を隠した家來がやつて來ました。その家來は、直ぐに王様の前へ引き出されました。すると、王様は、



「お前は、人を人とも思はぬと見える。王にさからふやうな家來を、生かしては置けない——」と云ふなり劍を抜いて、家來の首を切らうとします。その家來は、王様の手を押へ、
「暫らくお待ち下さい。どうぞ此處へ馬を一頭お出し下さいませ。私が王様の御心に逆らひました理由をお話いたしますから。」と申しました。王様は、馬を引き出してどうするかと思ひましたが、その家來の願



ひを許してやりました。馬は首をたれて、王様の前に現はれました。その家來は、すぐと馬に飛び乗つて、
「ゆふべ私は眠られずにゐますと、窓のちかくに聲がして「おまへは、先刻何と云つた？ かういふ時に、暖かい火の傍の、白い寢床の中で、柔かい麵麩を食べ、おいしい牛の乳を飲み乍ら、昔の話をしてもしてゐたら、どんなにやからうと云つたのではな

るか。明日歸り路に、蜜柑の樹の所へ來ると、お前は食べずには居られなくなる。だが食べればお腹が裂けて仕舞ふ——」と云ひますと、不思議にも、その家來の乗つてゐた馬のからだは、直ぐ様石になつてしまひました。忠義な家來は、落着いて、
「私があつたやうな事を致したのは、王様を大切に思ふ心からでございます。」と申しました。王様は大層喜んで、「私はお前のお蔭で生命拾ひをした。どうぞ許してお呉れ。」と云ひました。そこで王様は、その偉い家來に色々の御褒美を與へ、その男を家來の頭になさいました。その國の城の前には、今でも石の馬が、偉い家來に代つて、城の番をしてゐるさうです。(まはり)



土の観音様

五十嵐 力

越前の國坪江村に平田山、瀧澤寺といふ曹洞宗の古い御寺があります。この御寺の本尊は「土佛観音」と云つて、長は淺草の観音様と同じく一寸八分といふ小さいものですが、大層御利益があると云ふので、参詣人の絶えることがありません。この観音様の由来について尊い面白い話があります。この寺の附山を梅山和尚と申しました。この和

向さんが京都に居りました時分の事です。ある雨あがりの日に、六角堂の傍を通ると、そこに十八人の子供が寄り合つて、水溜りの雨水で土をこねて三十三體の観音像を作つて居りました。和尚さんは暫らく呆れて見て居りましたが、大層面白く思つて、其の観音様を一體いたゞきたいといひました。子供は快く承知しました。和尚はやがて其の一つを買つて喜んで禮を建てて居ると、十八人

の子供も、獲りの三十二體の佛像も、かき消すやうに消え失せてしまいました。和尚さんは、ハッと氣がついて、さて今は佛様が現はれて、自分のために守り本尊を作つて下さつたのであらうと大層喜んで、一生大切に信心し、後にこの瀧澤寺に安置したといふ事があります。梅山和尚は、この佛像を餘程大切に思つたものと見えて其後肌身離さず持つてゐたといふ事であり



ります。或時諸國を行脚してあるく途中で、或山中に迷つたことがあります。いくら行つても人里へ出られませんが、其の中に日が暮れはて、すつかり弱つてしまひましたが、あてもなくさまよひ歩く

中に、やうやく一軒の草屋を見つけた。やれうれしやと、和尚さんは疲れた足を引ずりながら辿りついて一夜の宿を乞ひました。許されて家に入り、身を横たへると、すぐに前後も知ら

ず眠つてしまひました。ところが此の家の主といふのは、世にも恐ろしい山賊で、其の女房といふのが、又亭主に劣らぬ鬼同様の女でありました。こんな所とは知らずに、泊つた和尚さんこそ災難であります。鬼夫婦は和尚さんが行脚僧にも似合はず、お金を持つてゐさうなのに目をつけて、其の夜、和尚さんの寝込を襲つて、一刀の下に細首を打ち落してしまひました。そして、後の始末は明日の事、今夜はゆつくり金儲の夢でも見ようと考へて、鬼夫婦は楽しい臥戸に入りました。

さて其の翌朝の事です。鬼夫婦はここにこもつて目をさますと何處からか御經を讀む聲が聞えて來ます。耳をたて、よく／＼聞くと、それは確かに和尚さんを殺した隣の室でありました。二人はびつくりしました。恐る／＼襖の隙からのぞきますと、これは不思議、昨夜殺した管の

和尚が、今、朝の御勤めをして居るではありませんか。夫婦は二度吃驚しましたが、男は怖いながらも、さすがに弱味を見せまいと思つて、『やい幽霊め、坊主のくせに、まだ浮ばずにまごまごして居るのか、往生際のわるい奴だ。』と奴鳴りますと、和尚さんは、不審さうに男を見上げてゐましたが、から／＼と笑つて、『御冗談仰しやるな、坊主だからとて幽霊とは情ない。御夫婦揃つて夢でも御覽じたか。』といひました。

『でも昨夜たしかに殺したのだ。』
『だつて、拙僧は此の通り、生きて居るではないか。』
押問答をしても際限がありません。
『では昨夜斬つたのは夢かしらぬ。』
と、鬼夫婦も少々心細くなり、又薄氣味も悪くな

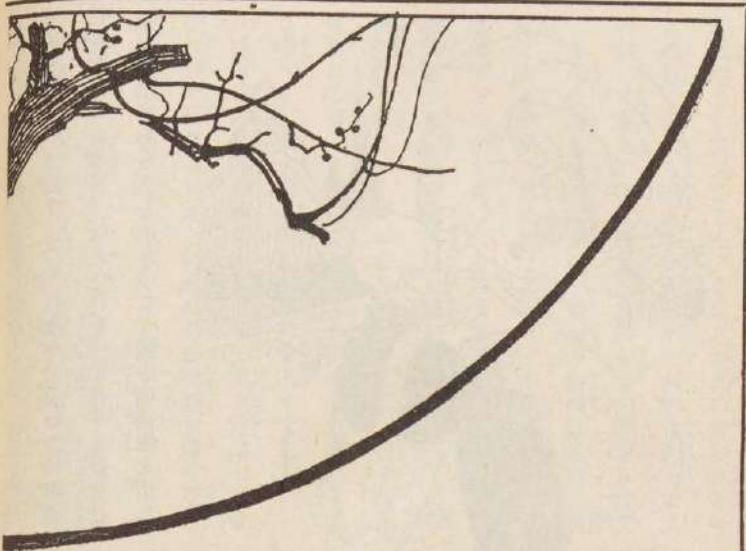
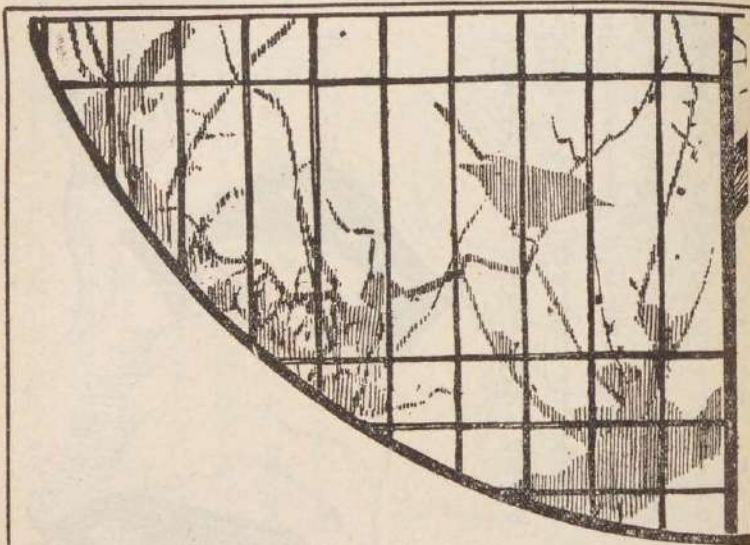
つて、ぼんやりとして居ります。

梅山和尚は、殺された管の命が、助かつて無事で居るといふのも、ひとへに平生信仰する観音様のおかげであらうといふので、懐中の御像を出し



て拜まうとしました。すると、こはいかに！御像の首筋に生々しい刀痕があつて、今にも首が落ちさうになつて居ります。さては観音様が身代りに立つて下さつたのであらう、有難や、うれしや

とばかり、幾度も押戴いて後に、之れを鬼夫婦に見せて、始終を語り聞かせました。鬼夫婦も今更に佛力に恐れ入つて、前非を悔い改め、すぐに髪を剃ろし、和尚の弟子となつて、主生涯佛に仕へて終つたといふ事でありませす。(をばり)



ちいさな鶯

若山 牧水

雪のつもつた
枝から枝へ
ちいさな鶯
あをい羽根して
びよんびよん渡る。
小枝さらさら
雪はちらちら
ちらちら動いて
羽根はあをい
あアをい鶯なぞ啼かぬ。

うぐひすよ
うぐひすよ
ちいさな鶯寒むいか
寒くばどんどと
火にあたれ。

どんどと燃ゆる
圍爐裡のそばで
黙つて聞けば
なアいた、啼いた
ほう、ほけ、べちよ
ほう、ほけ、べちよ。



よいお友達

神原泰

太郎さんはお日様のお子さんでした。かず多いご兄弟のうちでも、一番おとなしくて、すなほで、また、りこうでした。で、お父様は、朝早く金のお馬にまたがって、銀の鈴をリン／＼ならしながら、東から西へと、人や草木の一日々々と大きくなつて行くのを見まはつたり、また、御殿へお歸りに

なれば、太郎さんをお膝にのせて、『太郎さんは、いまにきつと、あの地球にゐる人たちのよいお友達になるてせう。』と言つて、いつもそばに置いてある立琴をおひきになるのが、一日のうちで、一等お樂でした。かうして可愛がられながら、草や木がだん／＼大きくなつて行くやうに、太郎さんも、だん／＼大きくなり、賢くなつて行きました。



ある冬の寒い夕方のことでした。めづらしく遊びかまけた太郎さんは、いつのまにか、お父様のお側をはなれて、遠い遠い所へ来てゐました。急に気がついて、あたりを見まはしましたが、一緒に遊んでゐたお友達は、どこへ行つたのか一人も見つかりませんでした。そのうちに、體中がぞく／＼寒くなつてきましたので、思はず泣き出し

ました。が、その時俄に、足もとの雲がはれて、下の方に、地球が美しく輝いて、おいで／＼をするやうに見えましたから、太郎さんは急にまた元氣になりました。本當にお父さんのおつしやつた通り、地球は美しいものでした。天の御殿にも見られない様な瓦斯や電気で、高い西洋館の窓は皆奇麗に輝いてゐました。街々のアーク燈は強い光を空に放つてゐました。毛皮にくるまつた人達は、冬の夜の寒さも忘れて、靴音軽く窓飾を見ながら歩いて行きました。奇麗な子供部屋では、兄弟が丸いテーブルを圍んで、楽しさうにカルタ遊びをしてゐました。太郎さんは大喜びで、そんな人たちとお友達にならうと思つて、美しい街へ降りて來ました。一番はじめに、太郎さんが、そつと忍び込んで行きましたのは、狭い小さなお部屋でした。そこ

では、一郎さんが弟の二郎さんと、嬉しうに、さつき買って戴いたばかりの積木をして遊んでゐました。しばらくの間、一郎さんはお家を、二郎さんはご門をつくつて、おとなしく遊んでゐました。ところが、二郎さんのご門があんまり大きいので、積木が足りませんでした。で、一郎さんに、積木を貸して下さいと言ひましたが、どうしても兄さんが聞いてくれませんでした。とら／＼喧嘩になつて了ひました。

そこで、おこつてぶち合ひをしやうとして立上つた二人の子供は、その時急に、お部屋一ぱいに奇麗な虹がかゝつて、その上を、金色の髪をした男の子が、立琴を引ながら



五〇
ら歩いて来るのを見ました。と、見る／＼うちに、お部屋は珍しい草花で一ぱいになり、テーブルの上の造りかけのお家も、ご門も皆ばら／＼になつて躍り出しました。一郎さんも、二郎さんも無中になつて、躍り出しましたので、太郎さんは、ます／＼節面白く歌ふのでした。

よならも言はないで、そつとそのお部屋を脱け出して、お隣の二階へ這入つて來ました。そこは、一郎さんの所とはまるで違つて、立派なお部屋でした。厚い窓ガラスの中では、温かさにストーヴが燃えてゐました。奇麗な畫本をぎつしりしまつた本箱や、ふいしうな菓子

はいつてゐる帳などが太郎さんの目を喜ばせました。それから、お部屋のまん中の搖籠には、青白い頬をした男の子がゐました。たつた今泣きやんだばかりと見えて、目に涙を一ぱいにためてゐました。太郎さんは、急いで搖籠から男の子を抱きおこして、お父様が太郎さんにして下さつた様に、ゆすぶりが歌を歌つて、静にお部屋を歩きました。すると、その男の子はにつこり笑つて、さも嬉しうに太郎さんの頭にしがみついたまゝ、すやすやと眠つて了ひました。



五二
太郎さんは、地球へ歸つてから、毎日々々立琴をひきながら、歌つて歩きました。子供たちはいつも、太郎さんの節に合せて面白く歌ひ歩きました。喧嘩などしてゐる子供も、太郎さんの歌を聞くと、急に喧嘩をやめて躍り出しうになりました。太郎さんの歌は心さへきれいであれば、どんな子供にても聞ける美しい／＼歌でした。(をばり)



雪夜の子猿

徳永壽美子

五二

お正月にもう間もないといふある日のことでした。朝からどんよりと空が曇つて、寒さがひどくさびしいと思つてゐると、やがてちら／＼と雪が降り初めました。そして其の一日、小やみもなく降り續けてゐたものですから、しまひにはお庭の大きな松の木なども、厚い／＼雪をしようつて、さすがに重たさうに見える程になりました。夕がたになると一しきり雀が賑やかに囀つてゐましたが、それもやんでからはひつそりとした、

ました。が、いつともなくうと／＼と眠りにはいつて了ひました。所が暫くしてから、二人の子供はふと目を覺しました。それは二人が寝てゐる子供部屋の軒下の方で、何かぼそ／＼と音のしてゐるのに気が付いたからでした。

「何だらう、變な音がするねえ。」

「何でせう、あら、變な聲もしてよ。」

「うん、犬かも知れないね、この大雪で困つてゐるだらう。可哀さうに。」

二人はなほも耳をすまして居ますと、犬か猫か分りませんが、何とも云へない悲しさうな啼聲が断えたり續いたりして聞えて來ます。二人は暫くぢつと聞いてゐましたが、たうとう我慢が出来なくなつて、

「ねえ輝ちゃん、うっちゃって置いて、もしこゝえて死ぬと可哀さうだから、起きて見てやらうぢ

もの静かな雪の夜になつて行きました。

朝彦と輝子と二人の子供は、早くから暖かい寝床にもぐり込んでゐましたが、時々小さな頭をそつともたげては耳を立て、さら／＼、さら／＼と戸にあたる雪の音を聞きとると、

「まだ降つてるね。」

「え、明日やんだら大きな雪だるまをこしらへませうよ。」

こんな事を話さうにひと／＼と云ひあつてゐ

やないか。」

「え、さうしませうよ。」

かう云つて二人は起き出しました。身を切るやうな寒さが、ぞつと素足にしみて、思はずがたがたふるへましたが、可哀さうなものを助けてやりたい心で一杯になつた二人は、ぢつと我慢をし乍ら雨戸をそろりと明けました。雪はまたまるで綿を投げるやうに、大きなかたまりになつて降り續いてゐましたので、其の雪あかりで外は可なり明るうございました。

と、見るとすぐ軒下の所に、一匹の小さな獸が死んだやうになつてうづくまつてゐます。

「犬だな。」と、朝彦は云つて、兵児帯を輝子にしっかりとさへて貰ひ乍ら、出來るだけ手をのばしてやつとそれを掴み上げました。そして脊中に積つてゐる雪を拂つて、そつと抱いて部屋の中に

五三

入りました。そして電燈の下に持つて来て見ると、どうでせう。犬だとはかり思つてゐたのは、可愛い子猿でした。

「あら、まあ、お猿さんよ。」と、輝子は突走つたやうな聲でいひました。

「やあ？ お猿か。」と、朝彦も全く驚いて云ひました。

二人は暫くあつげに取られてゐましたが、寒さにこえて、口も利けずじぶる／＼震へてゐる子猿を見ると、いかにも可哀さうになりましたので、早く暖めてやりたいと思ひました。が、夜中の事ですから火もありません。

「どうしやうか。」と、いろ／＼考へてゐましたが、ふと思ひついて、自分達のかけてゐた毛布を一枚づゝぬぐ事にしました。そしてそれに子猿を暖にくるんで、二人の床の間にに入れてやりました。か

中に轉がつてゐたの。と、優しく尋ねました。すると子猿は、

「はい、實は私はつい此頃、遠い田舎の山奥から、この近くのある猿廻しの處へ貰はれて参つたものでございませ

す。その猿廻しは、もうちさお正月だから、私の方々へ連れて歩いて、色々藝當をさせるのだと云つて、そ

れは／＼殿しい仕込みかたを致します。鐵砲をかついで兵隊さんのまねをさせた



うして置いて二人も寝るには寝ましたが、毛布をへらしたものですから、随分寒むくなりました。けれども、何だか大變にいゝ事をしたやうな心持がして、すぐには寝つかれもせず、もぞ／＼してゐました。

所が暫くしますと、子猿はひく／＼と動き出して、毛布の中からすつぽりと這ひ出しました。そして行儀よく二人の枕元に坐ると、両手をついて丁寧におじぎをして、

「坊ちやま嬢ちやま、誠にどうも有難うございました。さつき拾つて頂かなければ、私はこゝえ死ぬところてございました。お蔭様で命拾ひをいたしました。」と、幾度も／＼も頭を下げました。

二人は床の上にはらばひになつて、おつと子猿を見てゐましたが、子猿の言葉が終ると朝彦は、

「君は一體どこから來たの。何だつて今ごろ雪のり、をぼしを冠つて鈴をもつて、三番更ををどらせたり。そしい覺えが悪いと云つては、棒でびしびし撲つたり、一日ご飯を呉れなかつたりいたします。私は毎日々々泣いて暮らしてゐましたが、たう

とう我慢が出来なくなりましたので、どうかしてまたもとの山奥へ歸らうと思つて、今日の夕方、隙を見て、その猿廻しの家を逃げ出したのでございます。けれど、どつちへ行つていゝのか、さつぱり見當がつきませんで、あつちにまごまご、こつちにまご／＼して居るうちに雪は愈々ふり積るし、寒さは寒し、夜は更けるし、たうとう

「お家の軒下で倒れて了つたのでございます。」
と、くわしく身の上話を致しました。

二人の子供は、すっかり子猿
に同情して、

『可哀さうに。』

『さぞ辛らかつたらうね』



五六
え。」など、交る／＼云つてゐましたが、

『それで、』と、朝彦は一寸考へるやうにして、

『夜が明けてあかるくなつたら、この大雪でも、
すぐに田舎へ歸るのかい。道はよく分つてゐる
の。』と、心配さうに云ひました。所が子猿は、

『いゝえ坊ちやま、私はもう田舎へなんぞ参りま
せん。やつぱり猿廻しの處へ歸ります。』
と、さつぱり云ふではありませんか。

『へえ！、どうしてさう急に氣が變つたの。』

と二人は驚いて云ひました。すると子猿は、

『先程雪の中で死にさうになつた時、私はつくづ
く考へたのでございます。猿廻しに叱られるのは
矢張り私が悪かつたのでした。このことを死し
さうになる時程の苦しみをして、つまり命がけで一
生懸命に藝を覚えれば、さつとどんな事でもよく
覺えられて、猿廻しにも少しも叱られる事はある

「まらと思ひましたのです。」

『それはさうよ。』と輝子が直ぐに云ひました。叱
られるどころか、どんなに喜ばれて、可愛がられ
るか知れないわ。』

『全くだねえ。』と、朝彦もそばから『僕たちがお
父さんやお母さんに叱られるのだつてさうだよ。

いつだつて自分が先に何か悪い事をして居るんだ
ものね。』

こんな事を三人で話しあつてゐるうちに、段々
夜が明けかけて來ました。すると子猿は、

『では餘り明るくないうちに、お暇いたしま
す。そして早く猿廻しの家へ歸つて、一生懸命に
藝當を覚えませう。また、お正月になりました
ら、赤いきれいな着物を着させて頂いて、坊ちや
まがたのお家へも連れて來て貰ひませう。』と、さ
も嬉しさに云ひました。そして、『私のやうな獸

にまで、本當に御親切になすつて下さつた御恩は
いつまでも忘れは致しません。そのお禮に、今年
は丁度申歳と云つて、私共の年でございませうか
ら、お二人ともそれは／＼お仕合せになれますや
うに、一生懸命にお守り致します。お正月早々
から、さつと好い事がございませうよ。……では御
機嫌よう。』

かう云つて猿は丁寧におじぎをすると、朝彦が
すこし明けてやつた戸の間から、嬉しさに歸つ
て行きました。

朝彦と輝子とは、何だか愉快で／＼堪りません
ので、顔を見合せてにこ／＼、にこ／＼してゐま
した。それが癖になつて、それから毎日愉快にに
こ／＼して暮らしました。

今年はずつとにこ／＼して毎日仕合せに暮らす
こととせう。(そはり)



雪の神様

(つとむ)

横山 壽 篤

つかつたのでした。

孝作は、光圀公のお鬚がまつ白なその上、冠つてをられる笠も、身体も、雪で真白でしたから、雪の神様だと思つて了ひました。

「それでは氣をつけて、馬を牽いておくれよ」とお供の源起が申しました。

「兎に角、今日は、この子の家に泊めて貰ひませう。」と光圀公は馬の上で申されました。

今まで、少し歩いては立止つてゐた青が、光圀公を乗せてからは、如何にも愉快さうに、ずんずん勇んで進みました。馬の鈴がシヤラン……シヤラン……シヤラン……シヤランと鳴ります。孝作は

きかれました。

孝作は爐の端で、あした穿く草鞋を作つてゐました。初めのうちは、一生懸命に手を働かしてゐましたが、晝の疲れて、コクリ、コクリと居眠りを初めました。光圀公と源起とお母さんとは、その有様に顔を見合はせて、ニコ／＼と笑はれました。そして光圀公は

「これ／＼、もうやめにして休んだが好い、その代り、私が好い草鞋を上げよう、私の持つてゐる草鞋は、一里歩いて、二里歩いても破れぬ。三里行つても、四里行つても、五里行つても切れぬ。十日でも、廿日でも、一月でも穿ける不思議な草鞋ぢや。」と申されました。

「ありがたう、真個ですか、ほんとにそんな草鞋を持つてゐらつしやるのですか。」と孝作は云つて今まで眠かつた目がすっかり醒めました。

光圀公は大層慈悲深い人でした。もしか世の中に、百姓や町人を困らせてゐる殿様がありはせぬかと、いつもそれを心配してをられました。そこで、ある時は、お百姓のやうな風をして、諸國の有様を見て歩かれました。又ある時は、坊さんの姿をして、方々を廻つて御覽になりました。この折も源起と云ふ人を、只一人お供に連れて、盛岡の城下近くまで來られたのです。處が俄かの雪で、行きなやんでとられる處へ、孝作と馬とが見

は背を牽いて、雪をザクリ、ザクリと踏みしめながら、歩きました。

バカ、バカ、バカ、バカ、と音が雪を蹴立て、行く蹄音と、シヤラン……シヤラン……シヤラン……シヤラン……と勇ましく鳴る鈴の音に孝作は足を合せて進みました。

やがて孝作の家につきました。小さい荒ら家でしたが、雪が降り積つてゐるので、光圀公には美しく見えました。

孝作のお母さんは、病氣でぶら／＼してゐましたが、光圀公達にそれは／＼、親切でした。四人の圍んでゐる爐には、温い火が燃えてゐました。光圀公と源起とは、この氣の毒な母子の身の上を思ひつゞけました。孝作とお母さんとは、雪に惱まされてゐるこの旅人の身の上に同情しました。

光圀公は、母子の身の上を、いろ／＼と親切に

はりました。

六〇

「怪んとうぢや、嘘ではない、早くおやすみ、あしたの朝起きて御覽、枕頭にその草鞋を置いて置いてあげよう。」と光圀公は云はれて、孝作の喜ぶ顔をちつと見てゐらつしやいました。

そこで孝作は先にやすみました。やがて、光圀公と源起の二人も、その爐の端に横になつて、一夜を明されました。

あくる朝、まだ暗い内に、光圀公は、孝作のお母さんに禮をいつて、決して心配することはないと慰められました。そして小判を五枚取り出して「これはお禮のしるしぢや。」と云つて、無理に孝作のお母さんに渡されました。

「其内二枚丈、あの子の枕元においてやつて下さい、夕の約束ぢや。」とつけ加へて申されました。

「……………」お母さんは、有り難くて嬉しくて云ふ言葉が出ませんでした。涙が兩の頬に傳

「一里歩いて二里歩いても破れない草鞋と云ふのは是だな。でも此草鞋には緒がないなあ。」



「いや、とんだお世話をかけました。左様なら。」と光圀公と源起とはもう、かど口を出られました。お母さんは、闕際に兩手をついて、頭を下げました。光圀公が振り返つて見られた時、お母さんは袖で顔を蔽うて嬉し泣きに泣いてゐました。

カア、カア、カアと鳥が鳴きました。孝作はやつと目を醒して、まだ眠い目をぼんやりと開きました。と其處に——枕頭に、夢に見るやうな金の草鞋が一足、さら／＼と光つてゐました。孝作は跳ね起きました。夢ではないかと思ひながら、それを掴みました。

「お母さん、これはどうしたのですか。」と問ひました。お母さんは驚いてゐる孝作に「旅の方がお前に下さつたのです。」と云ました。

「お前は見たことがないだらうが、それは小判と云ふものですよ、大切なお錢ですよ。さあ早くお禮をお云ひなさい。」と云つてお母さんは、其處の障子を開かれました。今昇つたばかりの朝日が、この荒家の中にも照し込みました。小判は日の光を受けて、眩い程さら／＼と光りました。お母さんは東の方を指して

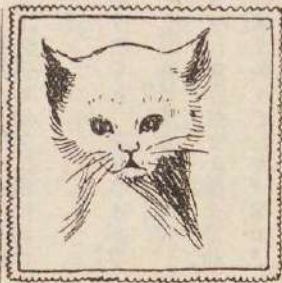
「向うへお出でなされた、もうお姿は見えぬが、向うへお出でなされた、お禮をお云ひなさい。」孝作はお母さんの仰るとほりに東の方に向いてお禮を云ひました。そして矢張あの方は雪の神様だつたのだと思ひました。

数日の後には、思ひがけなくも、お父さんが牢から歸つて來ました。そしてお母さんの病氣は、次第によく行きます。孝作はよい夢を見續けてゐるやうに、嬉しい事ばかりでした。(をほり)



飼猫と飼犬

橘 逸 雄



昔、宗右衛門といふ百姓家に、猫と犬とが飼つてあり

ましたが、どちらも、だいぶん年をとつてゐました。

ある日、宗右衛門はかみさんに向つて、

「あんな年をとつた猫を、いつまで飼つてゐてもしやうがない、近頃はちつとも鼠を捕つたことがない。ほんとうに役にたゝなくなつたのだから、川へ捨てゝしまはうぢやないか」と言ひました。

「そんなことをしては可哀さうですよ、猫でもまだ鼠を捕ることがあるのであります」とかみさんが言ひました。

「馬鹿だよ、お前は、鼠が眼の前でチヨロ／＼してゐても、ちつとも捕れないのだ。猫はこんど見つけ次第捨て

てしまふ積りだ。」と宗右衛門が云ひました。

かみさんは、これを聞いて大層心配しました。誰の後で、二人の話を聞いてゐた猫は、一層心配しました。

宗右衛門が仕事に行つた後で、猫はニヤオ／＼と、悲しさに泣きながら、かみさんの前へ出て來ました。かみさんは、

「おゝ、可哀さうな猫だ、早くお逃げ、主人の歸らないうちに早くお逃げ、でないと生命が危いから。」と言つてやりました。

猫はかみさんの言葉に従つて、しばらく家を出ました。そして足を引きすりながら、「生けんめいに森の方へ逃

げて行きました。宗右衛門が歸つて來た時、かみさんは、「どうしたのか猫が見えなくなりましたよ。」と言つておきました。

「そうか、それはよかつた。その方が猫のためによからう。それで猫はかたがついたが、こんどはあの犬だ。あの犬も年をとつて耳が遠くなり、それに眼が利かないものだから、むやみに吠えてばかりゐる。そしてたまに吠えなけりやならない時は、ほんやりしてゐるのだ。……さうだ、いゝことがある。首をしめて殺してやらう。」

と宗右衛門が言ひましたので、かみさんは驚いて、

「それだけはどうか止して下さい。犬だつてきつと役に立つことがありますよ。」と言ひました。

「お前はよつほど馬鹿だ。裏の畑にはいつでも泥棒が來てゐるぢやないか、それにあの犬は一度だつて吠えたことがないよ。こんど見つけたらもうそれつ切りだ。」と宗右衛門は言ひました。

かみさんは、これを聞いて大層心配しました。主間で寝そべりながら聞いてゐた犬は、一層心配しました。宗右衛門が仕事に行つた後で、犬は悲しさに泣きな



から、かみさんの前へ出て来ました。かみさんは、

「お、可哀さうな犬だ。早くお逃げ、主人の歸らないうちに早くお逃げ。でないとお前の生命が危いから。」といつてやりました。

犬はしつほを巻いて、大急ぎで逃げて行きました。宗右衛門が歸つて来た時、かみさんは「どうしたのか犬が見えなくなりましたよ。」と言つておきました。

「さうか、その方が仕合だ。」と宗右衛門が言ひました。かみさんは、猫や犬を可愛がつてただけ、大層悲しく思ひました。

宗右衛門の家を出た猫と犬は、森の中でひよつくり出合ひました。家にゐた時は、あまり仲のいゝ友達ではなかつたのですが、寂しい森の中で出合つたので、急に仲よくなりました。そして、木の下に休んで、不幸な身の上をしみじみなけき合ひました。

そこへ狐が通りかゝりました。狐はしよんほり坐つてゐる猫や犬を見ると、

「どうしてお前さんがたは、そんな所で座つてゐるのですが、一體何をアツムと言つてこぼしてゐるのですか。」

「承知しました。私たちはあなたの味方になつて戦ひませう。たとへ死んだつて、家の中で殺されるよりよつほどいゝから。と猫と犬が口をそろへて言ひました。

狼は熊や猪をつれて、約束の場所へ着きました。

そして、狐どもの来るのを待つてゐました。その間に、熊は狐どもの来るのを見やうと言つて、傍の木に昇りました。一度、あたりを見廻しましたが、何にも見えませんでした。二度、あたりを見廻しましたが、また何にも見えませんでした。三度、あたりを見廻した時には、「見える、深山な兵隊が見える。一人は長い槍をもつてゐるぞ。」と言つて叫びました。

しかし、それは猫だつたのです。猫が尾をピンと立て

と言つて尋ねました。

「私は若い時には、随分鼠を捕つたのです。しかし、もう老はれて働けなくなつたので、主人は私を川へ捨てやうとしたのです。で、私はこの森へ逃げて来ました。」と猫が答へました。

「私も若い時には、毎晩々々、主人の家を見はりしてゐたのです。それが、こんなに年をとつて耳が遠くなつたものですから、主人は私の首を絞めて殺してしまはうとしたのです。」と犬が答へました。

「世の中は、さういふものです。しかし、私が主人の家へ歸れるやうにしてあげませう。そのかはり、まづ私の難儀を助けてくれませんか。」と狐が言ひました。

「どんなことかは知りませんが、私たちの力のおよぶかざりお助しませう。」と、猫と犬とは口をそろへて言ひました。狐は言葉をつめて、

「私の難儀といふのはかうでう。今日、森を歩いてゐたら狼にあつたのです。すると狼は急に、私に戦をしやうと言ひ出しました。そして早速熊や猪をつれて、今私の方へやつて来るのです。」と言ひました。



てやつて来たのでした。で、狼や猪、はどつと笑ひました。熊はまた、「敵がこゝへ来るまでには、よつほど時間がかゝるから、この木の

又にしやがんで、しばらく眠らう。」と言つて眠りました。狼はその木の所で横になつて休んでゐました。また猪は藁の中へすつほり身を隠してゐました。しかし、耳だけ藁の間から出てゐたのでした。

そのうちに、狐は猫や犬をつれてやつて来ました。猫は藁の間から耳が出てゐるので、きつと鼠がゐるのだらうと思つて、いきなり跳びかゝりました。猪はびつくりして起き上つて、ウーとうなりながら、森の方へ逃げて行きました。猫は猪がとび出たのでなほさらびつくりして、急いで木の又へ登りました。こんどは木の又で眠つてゐた熊がびつくりしました。熊はあはて、木から跳び降りました。すると、ちやうどその下には狼が横になつてゐたのでした。狼はそのまま石のやうになつて死んでしまひました。

かうして、戦は狐たちの勝利になりました。

狐は歸る途で、澤山な鼠を捕りました。そして、宗右衛門の家の前まで来ると、猫に向つて、「これを一つく主人の室へもつて行つて、積みあけな

さい。」と言ひました。

猫は、狐に教へられた通りに、鼠を一つ一つ主人の室へもつていつて、積みあけました。

かみさんは、それを見ると、早速宗右衛門を呼んで、「ごらんさい、猫が歸つて来ました。澤山な鼠を捕つて。」と言ひました。

「これは不思議だ。俺はあの猫が鼠を捕らうとは思はなかつた。」と、宗右衛門は猫を見おろしながら言ひました。「ですから私がいつもさう言つたのですよ。うちの猫は一番いゝ猫だつて、それにあなたはちつともお聞きにならなかつたのですもの。」とかみさんが言ひました。

かうして猫はまた、宗右衛門の家で大切に飼はれることになりました。

狐は、こんどは犬に向つて、

「あなたは、日が暮れたら、裏の畑へ行つて、出来るだけ大きい聲を出して吠えなさい。」と言ひました。犬は教へられた通りに、日が暮れると、裏の畑へ行つて、出来るだけ大きい聲を出して吠えました。

あくる朝、かみさんはお参りをしやうと思つて、早く起きました。そして、序に伯母さんの家へお芋をもつて行つてあげやうと思つて、小屋へ行きました。ところが、小屋には昨日澤山積んでおいたお芋が一つもありませんでした。

かみさんは大聲で主人を呼んで、

「やつぱり私の言つたことはあつてましたよ。昨晚、泥棒が盗入つて、お芋を一つ残らずもつて行きました。

私の呼んだ時、あなたが行つてごらんになれば、こんなことにならなかつたのに。」

と言つてくやしがりました。

「あの犬はもう役にたゝないと思つてゐたのだ。」

と宗右衛門は頭をかきながら言ひました。

「ですから、私はあの犬は世界中で一番いゝ犬だつて言つてたのですよ。」

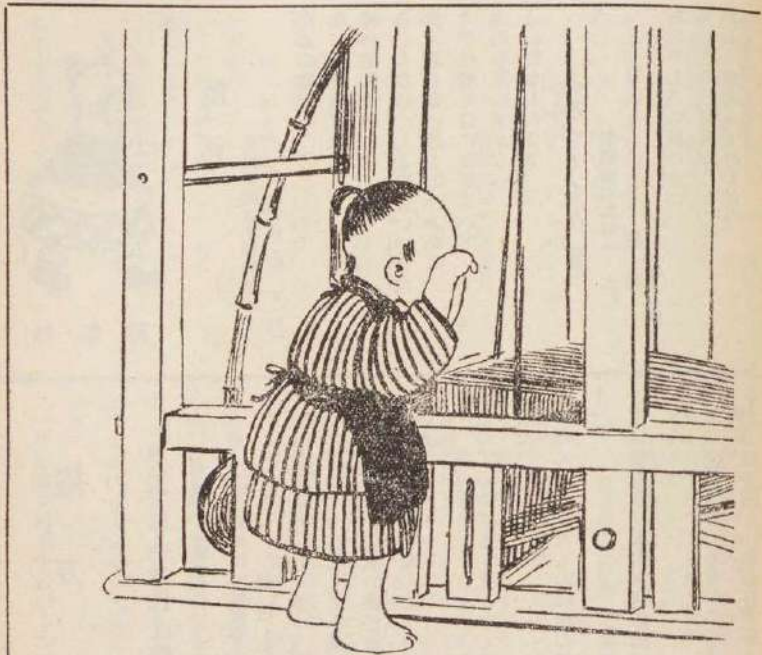
と、かみさんが言ひました。

お芋を盗つたのは狐だつたのです。

お蔭で、犬もまた宗右衛門の家で大切に飼はれることになりました。(まほり)



宗右衛門のかみさんは、それを聞いて、「きつとうちの犬が歸つて来たのでせう。あなた行つてごらんになりませんか。何か起つたのでせう。泥棒でも来てお芋を盗るのかも知れませんか。」と言ひました。「あの耳の遠い犬がどうしてそんなことが分るもんか。犬はいつでも、でたらめに吠えてゐるのさ。」と言つて、宗右衛門はなかく、行かうとはしませんでした。



買つてやれ

烏の伯母さん機織つてた

チンバタ チンバタ

機織つてた

更紗の綿入機織つてた

泣く兒に綿入

買つてやれ



烏の伯母さん

野口雨情

烏の伯母さん機織つてた

チンバタ チンバタ

機織つてた

木綿の腹掛機織つてた

泣く兒に腹掛



詩年幼

星 (賞)

兵庫縣糟道小學校第四 豊原清太郎

向ふの森に
赤い星見つけた、
青い星見つけた、
みいんないつしよに見いつけた
赤い星と青い星とのいふ事に
今年は豊年ほにほがさいて
道の小草に米がなる
といひましたとさ

みみづくさん (賞)

宇都宮市旭町一ノ九〇 三瓶秀子 (十五歳)

村のやしろの真の木に
ちひさな三日月かゝつた
旅から旅のみみづくが

古洋服に古帽子

大きな眼鏡をかけたんで
今夜はこゝに宿かろと
しわがれ聲をはり上げて
村の牧師のまねをして
夜のいのりを唄ひます

内地からいらつしや
つた伯母様

朝鮮大邱小學校第四 井上和子

ゆふべわたしがねてゐると
ざしきでこゑがいたします
なんだかひとつもわからない
がや／＼／＼／＼さわがしい
わたしがおきて見にゆけば
影も形も見えません
次の間かと見に行けば
内地の伯母様みえてゐた
わたしはつかしかつたので
おねまの中へにけこんで
一人でくすくすわらつてゐた
つぎのあさおきた時
わたしは顔をふうさいで

綴方

いつたいあれは何だらう (賞)

埼玉縣蓮華学校附屬小學校第五 杉山定三郎

二十三日の晩、山本君と玉藏院から
歸つて来た。すこしくると僕の足の前
をねづみぐらいの黒い物が地から五寸
位の所をねじれて飛んで行つた。
「あれつ」
と言つてる中にもう見へなくなつてし
まつた。

「今飛んで行つたものは何んだらうな
ー。」
と僕は頭をまけて山本君に聞いた。
「うんー」
と、山本君もわからないやうす。
僕はいよ／＼ふしぎにした。ねずみ

鳥屋のおぢさん

福島縣二本松第一小學校第四 岩本祝子

鳥屋のおぢさんは、毎日／＼夕方に
なると家の前の方にある大ききを組板の
上で、赤い手をしながら鳥の肉を切つ
てゐます。又時々はどぜうをさいてゐ
る事もあります。いつも／＼おどけを
かたつて、皆を笑はせながら仕事をし
て居ります。もう頭がてか／＼はけて
ゐるが、なか／＼元氣よく仕事をし
て居ります。うなぎなどをさいてゐる
とめづらしがつて子供が集まつて行く
と、「雨が降つて来たぞ」と言つて水を
ひつかけて皆をさわがせることもあり
ます。

一昨年私が丹毒をわづらつて、びつ

にしてあまり早すぎる。犬にしては、
小さすぎる。

いつたいあれは何だらう?

うめちやんの墓参 (賞)

福島縣二本松第一小學校第四 鈴木ハツ

うめちやんみんな花を持つて墓参
にきましたよ。うめちやんは一人で、
こんな山にゐるのですもの、さびしい
でせう。みんなでお参りに来ました。
あゝうめちやんはみんなが来たと思つ
てるのでせうか。冷たい土の下にた
だ一人眠つてゐるのですもの、木の葉
がひらく／＼と、飛んで来ます。じつと
目をつぶつて拜んだ私はうめちやんの
顔がはつきりというて見えます。私は
思ひ出して、あゝ四年も仲よく遊んで
ゐたうめちやんが、一人こんなところ
にゐるかと思ふと、なんだか悲しくな
つてしまひました。友達はもう皆歸つ

こひきながらあらいてゐるころ、目も
悪かつたので、私は鳥屋のおぢさんに
悪口を言はれたのをおぼえてゐます。
「びつ／＼に目つ／＼私も負けてゐるぞ、え
ゝおぢさんははけのくせに」と言ひ返
しました。おぢさんは「祝ちやんには
かなはない」と言ひながら、あのはけ
た頭を前から後へつるりとなせた事な
どは忘れやうとしても忘れることがで
きません。

私の弟

兵庫縣吉川小學校第四 安居タヅ

弟の律さんが、にはではとの下に車
のついたのを、しきりに引きながら遊
んでゐる。年は五つで、身の丈は三尺
ほどで、頭はかみをみぢかくさんばつ
して、ひたへはまるくそろへてある。
顔はまるくて、まゆげは三日月なりで、
目はぱつちりした二皮目の大きな目で

かくれてばかりでしたが
しかたがないから出て行つて
伯母様おはようございます
朝のおれいをいつてから
髪をゆひに行きました

秋の夜

兵庫縣日吉川小學校肆四
山口可也

きのふとつて来た
秋蟹は
ばけつの中で
がアさがさ
母はなわなひ
さーりさり
見るまになへる
おもしろさ
一べんなうて
見たいなあ
後の障子に
大きなかけ
とつつかまへて
みたいなあ
ふしぎなかけよ
大きなかけよ

猫

鎌倉大町千九
佐藤みさを

隣の猫と
うちの三毛と
顔を合せた、
垣一つ置いて
何か話した
何を話したか
知りたいな

主のないエス

朝鮮大邱小學校肆四
若松マスエ

だいぶんさむく
なつて来た
エスのちいさん
のそ〜と
ふるえながらに
たきびのそば
よつてぬくもりや
ねわり出す

□佳作 じてん車(福岡 大庭榮)おさるさ
ん(福岡 竹内萬壽雄)娘のお人形(大阪河
合富美)たぬき(大阪 春田君子)

はなは高くて、口は小さい。かほは白
赤く元氣な色である。着物はネルのほ
うしまで、おびはもすの白いのを後で
大きくむすんでゐる。足にはどうりの
大きなのをはいて、あちらこちらへと
引きまはしてゐる。

花びら

京都府葛野郡嵯峨村字上嵯峨
細川信子(十四歳)

或る寒い日、私が机にもたれて、本
を読んで居ましたらバツと、鳥のたつ
音がしましたので、ツツと、窓から外
を見ますと、あの折角二三日前に咲き
かけた、梅の花が散つて居ます。私は
あんまりおしかつたので、お庭へおり
てそれをひろひました。かぞへて見ま
したら、みんなで五枚ありました。そ
の花びらを本にはさみました。

私の家

橋多郡中村小學校肆六
真水秀吉

ませんから、私は自分ながらしあはせ
者だと思つてゐます。

電車の中

大阪府天王寺師範附屬小學校
前田秀雄

まんいんのふだがさがつてゐるのに
客はあとから〜のるので、たつてゐ
人は全くいたばさみのくるしさです。
又こしかけて居る者もおりやうとして
出口へ近づくのには人をおしわけたり
はき物につまづいたりして、仲々出ら
れません。又電車をまちがつてのつて
さわぐ田舎者や、のりこして困つてゐ
る年よりや、けたたましく泣きさけぶ
あかん坊らの間をぬふやうにしてある
く車しやうは、
「もう少し中へ御入り下さい。うんで
ん手だいに立つのは困りますから」
「何をいふのだい。もういつばいだ」
車しやうはきこえぬふりをして、

東下町の東がはに、金安のしるしの
ついた屋根看板のある家が見えます。
あれは私が生れてから十二歳の今日ま
で、たのしくくらしてゐる家でありま
す。中庭にはつき山や池などがあつて
金魚やこいがたくさんゐます。東のま
どをあけると、隣に包まれた天神山が
手に取る様に見えて、景色がようござ
います。

父は商業の用むきでいつも家に居り
ません。母は去年なくなりました。私
と弟とは毎日學校に行つて、たのしく
勉強して居ります。

おばさんの作つたお料理を家内七人
でいただきます。私と弟は大てい八時
半頃床につきます。おばあさんはござ
んがすんだ後、お休になります。お
ばさんや手代は十時まで働きます。お
金があるといふわけではありませんが
日用品や着物には不自由な事はござい

「もうこゝまででのれません。」
「のれない。馬鹿。昔のつてゐるらじや
あないか。」

といひました。車しやうはちよつと困

つたやうな顔をしました。又

「もうすこし中へお入り下さい。」と

書生ふうの人に言ふと、

「おればつかりに中へは入れといつて

はいれないぞ、そんな事だつたらしま

ひには天上へとびつかなければならな

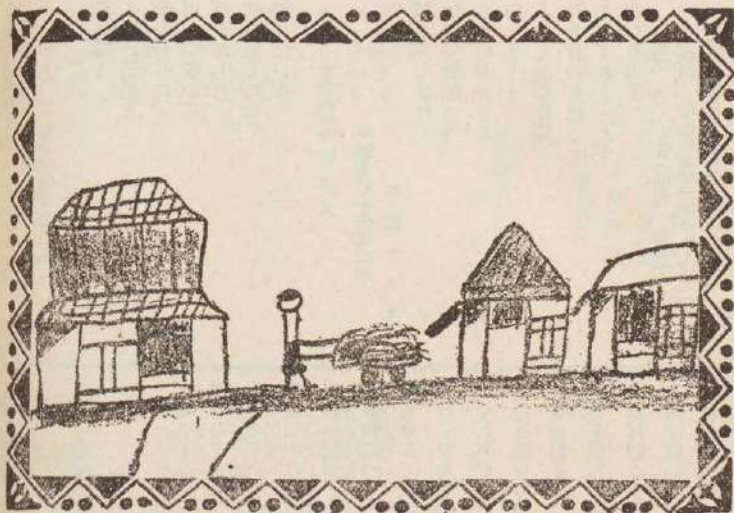
い……」

「……………」やがて電車は「ちん」とい
ふ音をたてて、ていりう場をすぎて行
きました。

買ひ物に行つた時

薩島縣二本松第一小學校肆四
遠藤クロ

昨日私と姉さんと夕の御飯を食べて
から坂の八百屋に漬菜を買ひに行きま
した。八百屋は私の内と親類なので、



エミキ岡柄 三尋校學小井柳縣口山 賞「家ノ私」 畫由自

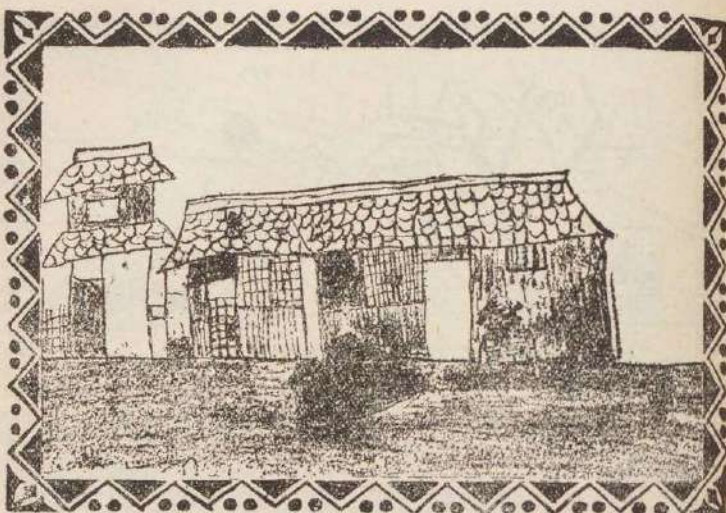
私が行くといつも果物などをたくさんよこします。今日も菜を買ひに行くと、直に大きな梨をくれました。姉さんは、明日は大きい姉さんのごほうじだと言つて、にんじんやごぼうや、色々の物を買つて来ました。内へ歸つて來ると姉さんは鹽がめを出して、菜をつけておいた桶を出して、今買つて來た菜をつけはじめました。私はまだねるに早いから、自分のひきだしからあみものを出して、明るい電燈の下に坐つて羽織のひもをあみはじめました。

日の丸 (賞)

福島縣飯坂小學校第六

佐藤 芳雄

日本晴れの秋の日曜日に、兄さんと弟の貞ちゃんや昌ちゃんや向ひの恭ちゃんや郁ちゃん等と、裏の館の山にきのことりに行きました。赤い紅葉の間から摺上川の水の音がします。杖や枝などにすがつて、登せてやつたり登せてもらつたりして皆んなでよう／＼平らたい草原についた時には、もう水の音も聞えません。只高い青空に小鳥がチ、チ、となくばかりです。
ここで晝飯を食べて、それからきのこをとらうと云ふ



エサ浦松 三尋校學小井柳縣口山 賞「家ノ私」 畫由自

のです。兄さんは紅葉がりにでも行つたかの様に、色々の紅葉をたくさんとつて來て敷いて下さいましたので、大きな包みをまん中に皆んな腰を下しました。
兄さんは包をといて、一番小さい昌ちゃんから順にお握を渡しました。

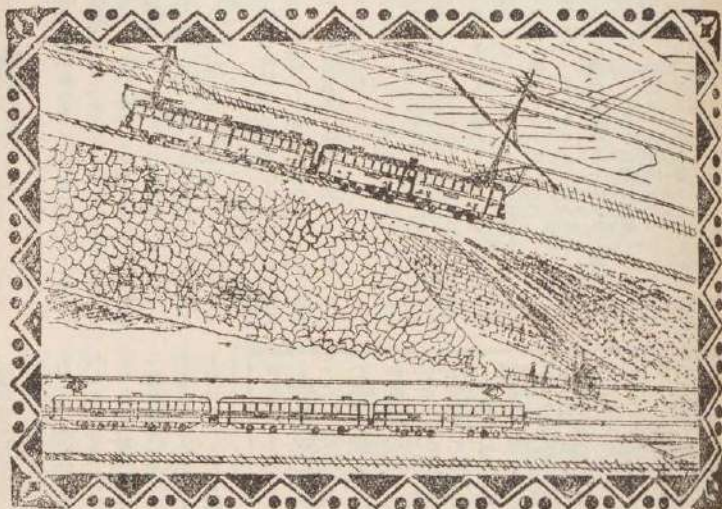
昌ちゃんはさつそくお握を二つに割つて、「皆さん禮をなさい。」と申しました。可愛い昌ちゃんの手の白のお握には赤い梅干が一つありました。兄さんや私や皆んなは不思議に思ひながら、わけも分からずにお握に禮をしました。「何ぞ？」と兄さんが聞きますと、昌ちゃんはニツコリりと笑つて、

「白地に赤いのは日の丸です。」と申しました。兄さんはうまい／＼と言つてほめました。皆んなもバンザイとほめますと向ひの山までがバンザイとほめました。

昌ちゃんは二年生です。何時か先生に聞いたお話を思ひ出して言つたださうです。

昌ちゃんはほんとうにかしこい子です。

口佳作 △下崎 福島 松田サダ△秋の興きに 福島 大松
ヒサ△井戸ばたで 福島 菊地チウ△預足 加藤英郎△芝居
目物 福島 松田瓦屋△たすけられたへび 埼玉 青木重治
△タリヤと光ちゃん 東京 江皿牛江



助之英田島 六尋校學小中府京東 (賞) 「車電」 畫由自

また、齊藤勇治郎さんの青インキで描いてあるので寫眞にするとぼんやりしてしまふし、少しぞんざいな畫だと思ひますね。

藤原軍明さんの色鉛筆畫も大さうきれいですが、地面や、山や、木が棕色で空が黄色に染めてありましたから、寫眞にとると反對に濃淡になります。

山路選子さんの色鉛筆畫もやつぱりさうです。でも選子さんはなか／＼上手ですね。こんどは濃い黒い鉛筆で描いたのを送つて下さい。

井伊多計子さんはお寫生ですが、美しく描けてはゐますが、ちと雜踏の畫などの眞似が加はり過ぎて居ますよ。あなたは文房堂でルフラン製のチョークを買つて置いて、いろ／＼なものをそれで寫生して御覽なさい。

津田清一郎さんも、森井秀子さんも、やつぱり雜踏の畫をまねなさいましたね。こんどはあなたに一つ注文を出して見せよう。こんどはあなたのお父さんを寫生して送つて下さい。

堀内治郎さんも、前田秀雄さんも、山口勲さんも今度は寫生畫を送つて下さい。

島田英之助さんの畫は面白い畫ですね。あなたは、たいへんめんみつなお顔をもつて居りますよ。

松浦サエさんの畫も、鶴岡大助さんの畫もみないゝ寫生です。津田文江さんの畫は良い畫ですが、もつといゝ畫があつたので、雜踏に出ませんでした。山本先生の文庫へ大切にしまつておきました。(一)



助大崎富 三尋校學小井柳縣口山 (賞) 「きしけ」 畫由自

今度は澤山集りました。

真い畫も澤山ありました。けれども、やはり鉛筆の線がうすかつたり、ぞんざいに描いてあつたり、人の繪を眞似したのが多くて、さういふものはどれも雜踏へ出すことが出来ないのです。

たとへば、小山内徹さんの畫帖の畫はたいへん面白いのですが、用紙がうす黄色い處へ鉛筆の線が灰色なので寫眞にとつても出ないのです。

第二回應募畫評

山本 鼎



信 通

口綴方を讀んで

杉山君の「いつたいあれは何だらう」とはとくに優れておました。これまでもあまり見られない「作」です。文章がひきしまつて、短い言葉のうちに、言ひたいだけの事をはつきり言ひ表してゐます。その他はどういふものか、とくに優れたといふ程のものがありませんでした。そのうちでは、「樺ちゃんの手紙」や「鳥屋のおちさん」などはいい方です。岩木さん、忘れやうとしても忘れることができません。などいふ古い言葉はあまりお使ひにならぬやうに下さい。

「私の弟」や「私の家」はすぐれていい、作ではありませんが、正直にお書きになつた所がよるしい。「私の弟」はほんとうに正直に、見たまゝを、そのまま書いてあります。さういふ氣持でおけいこなさい。「買ひ物に行つた時」もすなはち書いてあります。

「電車の中」もかなりよく書いてあります。まつたく近頃の電車はよく込みあふので、都會に住んでゐる人たちは随分苦勞です。「日の丸」は氣のきいた作です。恭ちゃんや都ちゃん、夏の前山へ登るところが大へんよくできてゐました。

はつきり書いて下さい。幼年詩や童話は、なるだけ、半紙か、原稿用紙に、墨か、インキかて書いて下さい。書き方は、はじめに題を書いて、つぎに何學校何学年、もしくは、何々縣何々村（この場には年齢を書いて下さい）それから姓名を書いて、そして、幼年詩なり、綴方なりを書いて下さい。綴方は、なるだけ、一行、十七づつ（〇やも一字として）に書いて下さい。

封筒には、自由畫なら「自由畫」、幼年詩なら「幼年詩綴方なら「綴方」と書いて下さい。

童話童謡募集

吾々はかくれた童話・童謡作家を世に紹介したいがために、今後毎月童話・童謡を募集いたします。但し募集に應ずる童話・童謡は内容形式共に従来の古い型を破つた新しみのあるものでなければなりません。併し、題材は作家の自由です。また吾々は、讀者の標準を十二三才のことに置いてゐますから、文章は凡て、その前後の年齢のことに、理解される言葉をもつて書か

佳作のうちでは、松田君の「芝居見物」などは面白いものでしたが、何しろ題材が題材です。上出来とは言へません。でも、むづかしいことを、あれだけお書きになればたいしたものですよ。あの中に、おばあさんと番頭の話には、一同どつと笑はされた。といふのがありましたが、あれだけではどうして、一同が笑はされたのか讀者にはよく分りません。

本誌主催の「青い鳥」に就て

巻頭に廣げてある通り、二月十四日、十五日の兩日、東京有楽座に於て、メーテルリングの童話劇「青い鳥」を公演する事になりました。メーテルリングの「青い鳥」といへば、誰でも知つてゐる位、世界的に有名な話かも知れません。此の芝居ほど面白く、且立派な童話劇は無いといはれてゐる程です。ですから、日本でも幾度かこの芝居をやらうと企てられましたが、餘りに費用がかかり過ぎるのと、何時も中絶してゐました。所が、今度はからずも、民衆座の努力によつて、実現せられぬものと

謝られてゐる此の著作が、望にむかひに渡せられる事になつたのです。そして、その筆名は岡本龍一氏が、長い間の「青い鳥」に對する研究を傾けて爲されるのですから、この興行は、日本の演劇史上に大きな記録を残すばかりでなく、わが國童話劇の最初の上演として非常に意味深い興行となるでせう。本誌はこの紀念すべき興行に當り、是非讀者の少年少女諸君に此の芝居をお見せたいと思ひ、民衆座と契約し、特別に畫興行として二日間演ずる事にいたしました。皆さんは是非御誘ひ合して、この芝居を御覧下さいまし。きつと、こんなに面白い芝居があるのかと驚かれるに相違ありません。

れたものを求めます。原稿の枚数は童話の場合には、十行廿字詰原稿用紙八枚以内、童謡の場合には四號活字で二頁一杯に組込まれる程度です。優秀な作品は、本欄に掲げ、作家として廣く紹介し、且つ相當稿料を差上げます。

さういふ所をよく氣をつけて、讀者になるほどと思はせるやうに書いて下さい。加藤君の「遠足」は、少しも飾らずに書いた所はいいのですが、「一筆はじめにくじやくを見た。それから……ぞうの所へ行つた。それから……羊の所へ行つた。」と書いてあるだけで、象がどんなことをしてゐたか、くじやくがどんな色をしてゐたか、ちつとも分りません。せつかく動物園へ行つたら、もつと目や耳をはたらかしてゐらつしやい。さうするといふ綴方ができます。

皿田さんは、ダリヤの花や、バラの花を見て、ほんとうに感じたままをお書きになればむづかしい形容などしなくてもいいのです。でも、あなたは今に上手になれます。みなさんのうちには、木や花とお話をしたことが、ずいぶん書いてありますが、さういふことは、なかく難しい事ですから、あんまり無理にお話なさらない方がいいと思ひます。尋常一年や、二年のこともたちの綴方が見られないのがざんねんです。（記者）

原稿についての注意 自由畫は、山水册先生がいちもおつしやるとなり、流し鉛筆か、または、墨かインキかか、しつかりした筆に

「金の船」誌友募集

「金の船」誌友を募集いたします。誌友になれば、いろいろな便宜や持典がございます。「金の船」誌友規則お望みの方は編輯所宛に申込んで下さい。お送りいたします。

「金の船」誌友

- 長野 橋本全人君 ○千葉 岡村守君 ○静岡 木村祐君 ○東京 山内右文君 ○東京 林芳雄君 ○千葉 渡邊知信君 ○朝鮮 石井登美子君 ○山口 松重善代子君 ○岩手 川村謙平君 ○鹿児島 齋藤貞安君 ○北海道 植木天香君 ○宮城 小山長兵衛君 ○伊豫 中村輝君 ○愛知 桑村太郎君 ○中島 中島冲君 ○日高 荒野勇君 ○三重 熊澤正君 ○中村 中村謙雄君 ○埼玉 肥土喜三郎君 ○長野 細田ツタ君 ○岩手 葛岡芳郎君 ○三重 中島千六君 ○朝鮮 杉山米太郎君 ○長野 伊藤嘉根吉君 ○朝鮮 鄭永喜君 ○長野 木内真君 ○大分 齋田品子君 ○島根 五田忍聖君 ○北海道 星川シ子君 ○静岡 松井昭敬君 ○徳島 中原惠君 ○北海道 青沼信義君 ○静岡 牛田民安君 ○福井 立山香城君 ○除前 齋藤清治君 ○富山 金木作次郎君 ○北海道 木内勝美君 ○福井 小澤秀吉君 (以下次號)

子供の自由畫を募る

山本鼎

子供諸君、——こんどこの雑誌で君たちの畫をいたして、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月四つぐらゐる此處に寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雑誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちがかつてに描いた畫のことです。ですから、君たちは、お手本や、雑誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顔なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらん下さい。
お手本を見て描いたり、雑誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ。
それから、あんまり、うすく、ほんやりかいてある畫

は、たいそういい畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雑誌へは出されません。そのかはり、そんないい畫は僕が戴いて、だいに、しまつておきます。

大人諸君、——以上の企を御賛成下さいまし、子供達には、本来、お手本を真似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出来るだけ、良質の畫用品を與へて下さいまし、そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さいまし。
大人に、智、感、情がある如く、子供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から直接に捉へられた、そのものです。

少年少女の創作募集

(原稿は東京市本郷區根津宮本町廿九番地(金の船)編輯所へ送つて下さい)

自由畫 山本鼎先生選

綴方 自由畫のことは、山本鼎先生が、前頁に書いて下さつたから、ごらん下さい。

編輯局選

綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、ふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

若山牧水先生選

幼年詩は山なり森なり花なりを見て、感じたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に書いて下さい。

綴方は、童謡は用紙も字數も、みなさんの自由です。

住所、姓名、年齢などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

人のものを真似たり雑誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

よく出来たのは、雑誌にのせます、中でも優れたには賞品をさしあげます。

締切は毎月十五日です。それから以後に着いたのは翌月へ廻します。

□定價一冊貳拾五錢 送料壹錢

□三ヶ月分三冊(送料共)七拾五錢

□半年分六冊(送料共)壹圓五拾錢

□壹ヶ年分十二冊(送料共)貳圓九拾錢

振替口座東京〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい

▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷う御座います

▽切手代用は(金銀切手)一割増に願ひます

▽御注文の場合には御登第何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さい

▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

(意注の金送)

大正九年一月五日印刷納本(毎月一回)

大正九年二月一日發(一日發行)

編輯人 喜藤 佐次郎

發行人 横山 壽 萬

印刷人 高橋 郁

印刷所 三協印刷株式會社

發行所 キンノツノ社

大正八年十月十六日 大正九年一月五日 發行
大正九年二月一日發行 (第12回) 第12号

繪雜誌界の權威

日本の子供

定價冊貳拾錢送料五厘
半年分送料共壹圓拾五錢
壹年分送料共貳圓貳拾錢

帝國劇場付畫家執筆
上品でうつくしい繪
面白くて爲になる話
每號新工夫の大附録
最良の幼年向繪雜誌

カカヨシ

定價冊拾貳錢送料五厘
半年分六冊送料共七拾錢
壹年分送料共壹圓壹拾錢

東京市麹町九段下
キンノツノ社發行
振替東京支〇五七貳